

# 硝子戸の中

夏目漱石



一冊堂青空文庫



## 硝子戸の中

夏目漱石

### 一

硝子戸ガラスどの中から外を見渡すと、霜除しもよけをした芭蕉ばしやうだの、赤い実みの結なった梅もどきの枝だの、無遠慮に直立した電信柱だのがすぐ眼に着くが、その他にこれと云つて数え立てるほどのものはほとんど視線に入つて来ない。書齋にいる私の眼界は極きわめて単調でそうしてまた極めて狭いのである。

その上私は去年の暮から風邪かぜを引いてほとんど表へ出ずに、毎日この硝子戸の中にばかり坐すわっているのだ、世間の様子はちつとも分らない。心持が悪いから読書もあまりしない。私はただ坐すわったり寝たりしてその日その日を送っているだけである。

しかし私の頭は時々動く。気分も多少は変る。いくら狭い世界の中でも狭いなりに事件が起つて来る。それから小さい私と広い世の中とを隔離しているこの硝子戸の中へ、時々人が入つて来る。それがまた私にとっては思いがけない人で、私の思いがけない事

を云つたり為たりする。私は興味に充ちた眼をもつてそれらの人を迎えたり送つたりした事さえある。

私はそんなものを少し書きつづけて見ようかと思う。私はそうした種類の文字が、忙がしい人の眼に、どれほどつまらなく映るだろうかと懸念している。私は電車の中でポケットから新聞を出して、大きな活字だけに眼を注いでいる購読者の前に、私の書くような閑散な文字を列べて紙面をうずめて見せるのを恥ずかしいものの一つに考える。これらの人々は火事や、泥棒や、人殺しや、すべてその日その日の出来事のうちに、自分が重大と思う事件か、もしくは自分の神経を相当に刺激し得る辛辣な記事のほかに、新聞を手取る必要を認めていないくらい、時間に余裕をもたないのだから。

——彼らは停留所で電車を待ち合わせる間に、新聞を買って、電車に乗っている間に、昨日起つた社会の変化を知って、そうして役所か会社へ行き着くと同時に、ポケットに収めた新聞紙の事はまるで忘れてしまわなければならないほど忙がしいのだから。私は今これほど切りつめられた時間しか自由にできない人達の輕蔑を冒して書くのである。

去年から歐洲では大きな戦争が始まっている。そうしてその戦争がいつ済むとも見当

がつかない模様である。日本でもその戦争の一小部分を引き受けた。それが済むと今度は議会が解散になった。来るべき総選挙は政治界の人々にとつての大切な問題になっている。米が安くなり過ぎた結果農家に金が入らないので、どこでも不景気だと零こぼしている。年中行事で云えば、春の相撲すもうが近くに始まろうとしている。要するに世の中は大変多事である。硝子戸の中にじつと坐っている私なぞはちよつと新聞に顔が出せないような気がする。私が書けば政治家や軍人や実業家や相撲狂すもうきやうを押し退おけて書く事になる。私だけではとてもそれほど胆力が出て来ない。ただ春に何か書いて見ると云われたから、自分以外にあまり関係のないつまらぬ事を書くのである。それがいつまでつづくかは、私の筆の都合つごうと、紙面の編輯へんしゅうの都合とできまるのだから、判然はつきりした見当は今つきかねる。

## 二

電話口へ呼び出されたから受話器を耳へあてがって用事を訊きいて見ると、ある雑誌社の男が、私の写真を貰もらいたいのだが、いつ撮とりに行って好いか都合を知らしてくれろと

いうのである。私は「写真は少し困ります」と答えた。

私はこの雑誌とまるで関係をもっていなかった。それでも過去三四年の間にその一二冊を手にした記憶はあった。人の笑っている顔ばかりをたくさん載<sup>の</sup>せるのがその特色だと思つたほかに、今は何にも頭に残っていない。けれどもそこにわざとらしく笑っている顔の多くが私に与えた不快の印象はいまだに消えずにいた。それで私は断<sup>こと</sup>わろうとしたのである。

雑誌の男は、卯<sup>う</sup>年の正月号だから卯年の人の顔を並<sup>よ</sup>べたいのだという希望を述べた。

私は先方のいう通り卯年の生れに相違<sup>と</sup>なかった。それで私はこう云った。――

「あなたの雑誌へ出すために撮<sup>と</sup>る写真は笑わなくつてはいけないのです」

「いえそんな事はありません」と相手はすぐ答えた。あたかも私が今までその雑誌の特色を誤解していたごとくに。

「当り前の顔で構いませんなら載せていただいても宜<sup>よろ</sup>しゅうございます」

「いえそれで結構でございますから、どうぞ」

私は相手と期日の約束をした上、電話を切った。

中<sup>なか</sup>一日<sup>いちにち</sup>おいて打ち合せをした時間に、電話をかけた男が、綺麗<sup>きれ</sup>な洋服を着て写真機を

携たずさえて私の書齋しよさいに這入はいって来た。私はしばらくその人と彼の従事している雑誌について話をした。それから写真を二枚撮とって貰った。一枚は机の前に坐っている平生の姿、一枚は寒い庭前にわさきの霜しもの上に立っている普通の態度であつた。書齋は光線がよく透とほらないので、機械を据すえつけてからマグネシアを燃もした。その火の燃えるすぐ前に、彼は顔を半分ばかり私の方へ出して、「御約束ではございますが、少しでも笑つていただけますまいか」と云つた。私はその時突然微かすかな滑稽こっけいを感じた。しかし同時に馬鹿な事をいう男だという氣もした。私は「これで好いでしょう」と云つたなり先方の注文には取り合わなかつた。彼が私を庭の本立こだちの前に立たして、レンズを私の方へ向けた時もまた前と同じような鄭寧ていねいな調子で、「御約束ではございますが、少しでもか……」と同じ言葉を繰くり返かえした。私は前よりもなお笑う氣になれなかつた。

それから四日ばかり経たつと、彼は郵便で私の写真を届けてくれた。しかしその写真はまさしく彼の注文通りに笑つていたのである。その時私は中あてが外はずれた人のように、しばらく自分の顔を見つめていた。私にはそれがどうしても手を入れて笑つてるように拵こしらえたものとしか見えなかつたからである。

私は念のため家うちへ来る四五人のものにその写真を出して見せた。彼らはみんな私と同

様に、どうも作って笑わせたものらしいという鑑定を下した。

私は生れてから今日までに、人の前で笑いたくもないのに笑って見せた経験が何度となくある。その偽りが今この写真師のために復讐を受けたのかも知れない。

彼は気味のよくない苦笑を洩らしている私の写真を送ってくれたけれども、その写真を載せると云った雑誌はついに届けなかった。

### 三

私がHさんからヘクトーを貰った時の事を考えると、もういつの間にか三四年の昔になっっている。何だか夢のような心持もする。

その時彼はまだ乳離れのしたばかりの小供であった。Hさんの御弟子は彼を風呂敷に包んで電車に載せて宅まで連れて来てくれた。私はその夜彼を裏の物置の隅に寝かした。寒くないように藁を敷いて、できるだけ居心地の好い寢床を拵えてやったあと、私は物置の戸を締めた。すると彼は宵の口から泣き出した。夜中には物置の戸を爪で掻き破って外へ出ようとした。彼は暗い所にたった独り寝るのが淋しかったのだらう、翌る



朝<sup>あさ</sup>までまんじり<sup>まんじり</sup>ともしない様子であつた。

この不安は次の晩もつづいた。その次の晩もつづいた。私は一週間余りかかつて、彼が与えられた藁<sup>わら</sup>の上によく安らかに眠るようになるまで、彼の事が夜<sup>よる</sup>になると必ず気にかかった。

私の小供は彼を珍らしがって、間<sup>ま</sup>がな隙<sup>すき</sup>がな玩弄<sup>おもちゃ</sup>物にした。けれども名がないのでついに彼を呼ぶ事ができなかった。ところが生きたものを相手にする彼らには、是非とも先方の名を呼んで遊ぶ必要があつた。それで彼らは私に向つて犬に名を命<sup>めい</sup>けてくれとせがみ出した。私はとうとうヘクトーという偉い名を、この小供達の朋友<sup>ほうゆう</sup>に与えた。

それはイリアッドに出てくるトロイ一の勇将の名前であつた。トロイと希臘<sup>ギリシャ</sup>と戦争をした時、ヘクトーはついにアキリスのために打たれた。アキリスはヘクトーに殺された自分の友達の讐<sup>かたき</sup>を取つたのである。アキリスが怒<sup>いか</sup>つて希臘<sup>がた</sup>方から躍<sup>おど</sup>り出した時に、城の中に逃げ込まなかつたものはヘクトー一人であつた。ヘクトーは三たびトロイの城壁をめぐつてアキリスの鋒先<sup>ほこさき</sup>を避けた。アキリスも三たびトロイの城壁をめぐつてその後<sup>あと</sup>を追いかけた。そうしてしまいにととうヘクトーを槍<sup>やり</sup>で突き殺した。それから彼の死骸<sup>しかい</sup>を自分の軍車<sup>チャリオット</sup>に縛<sup>しば</sup>りつけてまたトロイの城壁を三度引<sup>ひ</sup>き摺<sup>ず</sup>り廻した。……

私はこの偉大な名を、風呂敷包にして持つて来た小さい犬に与えたのである。何にも知らないはずの宅うちの小供も、始めは変な名だなあと云っていた。しかしじきに慣れた。犬もヘクトーと呼ばれるたびに、嬉うれしそうに尾を振った。しまいにはさすがの名もジョンとかジョージとかいう平凡な耶蘇ヤソ教きょう信しん者じゃの名前と一様に、毫ごうも古典クラシカル的な響を私に与えなくなった。同時に彼はしだいに宅のものから元もとほど珍重されないようになった。

ヘクトーは多くの犬がたいてい罹かるジステンパーという病氣のために一時入院した事がある。その時は子供がよく見舞みまいに行つた。私も見舞に行つた。私の行つた時、彼はさも嬉うれしそうに尾を振つて、懐なつかしい眼を私の上に向けた。私はしゃがんで私の顔を彼の傍そばへ持つて行つて、右の手で彼の頭を撫なでてやつた。彼はその返礼に私の顔を所嫌ところきらわず舐なめようとしてやまなかつた。その時彼は私の見ている前で、始めて医者いしやの勧すすめる小量の牛乳を呑のんだ。それまで首を傾かしげていた医者も、この分ならあるいは癒なをるかも知れないと云つた。ヘクトーははたして癒なをつた。そうして宅うちへ歸つて来て、元氣に飛び廻まわつた。

日ならずして、彼は二三の友達を拵えた。その中で最も親しかったのはすぐ前の医者  
の宅に在る彼と同年輩ぐらいの悪戯者であつた。これは基督教徒に相應しいジョンとい  
う名前を持つていたが、その性質は異端者のヘクトーよりも遙に劣つていたようであ  
る。むやみに人に噛みつく癖があるので、しまいにはとうとう打ち殺されてしまった。  
彼はこの悪友を自分の庭に引き入れて勝手な狼藉を働らいて私を困らせた。彼らはし  
きりに樹の根を掘つて用もないのに大きな穴を開けて喜んだ。綺麗な草花の上にわざと  
寝転んで、花も茎も容赦なく散らしたり、倒したりした。

ジョンが殺されてから、無聊な彼は夜遊び昼遊びを覚えるようになった。散歩などに  
出かける時、私はよく交番の傍に日向ぼっこをしている彼を見る事があつた。それでも  
宅にさえいれば、よくうさん臭いものに吠えついて見せた。そのうちで最も猛烈に彼の  
攻撃を受けたのは、本所辺から来る十歳ばかりになる角兵衛獅子の子であつた。この子  
はいつでも「今日は御祝い」と云つて入つて来る。そうして家の者から、麵麴の皮と一  
銭銅貨を貰わないうちは帰らない事に一人できめていた。だからヘクトーがいくら吠え  
ても逃げ出さなかつた。かえつてヘクトーの方が、吠えながら尻尾を股の間に挟んで物  
置の方へ退却するのが例になつていた。要するにヘクトーは弱虫であつた。そうして操

行からいうと、ほとんど野良犬のらいぬと扱えらぶところのないほどに墮落していた。それでも彼らに共通な人懐ひとなつつこい愛情はいつまでも失わずにいた。時々顔を見合せると、彼は必ず尾を掉ふつて私に飛びついて来た。あるいは彼の背を遠慮なく私の身体からだに擦すりつけた。私は彼の泥足のために、衣服や外套がいとうを汚よじした事が何度あるか分らない。

去年の夏から秋にかけて病氣をした私は、一カ月ばかりの間あいだついにヘクトーに会う機会を得ずに過ぎた。病がようやく愈おひたつて、床の外へ出られるようになってから、私は始めて茶の間の縁えんに立って彼の姿を宵闇よいやみの裡うちに認めた。私はすぐ彼の名を呼んだ。しかし生垣いけがきの根にじつとうずくまっている彼は、いくら呼んでも少しも私の情けなさけに応じなかった。彼は首も動かさず、尾も振らず、ただ白い塊かたまりのまま垣根にこびりついてるだけであつた。私は一カ月ばかり会わないうちに、彼がもう主人の声を忘れてしまったものと思つて、微かな哀愁あいしゅうを感じずにはいられなかった。

まだ秋の始めなので、どこの間の雨戸も締められずに、星の光が明け放たれた家の中からよく見られる晩であつた。私の立っていた茶の間の縁には、家のものうちものが二三人いた。けれども私がヘクトーの名前を呼んでも彼らはふり向きもしなかった。私がヘクトーに忘れられたごとくに、彼らもまたヘクトーの事をまるで念頭に置いていないよう

に思われた。

私は黙って座敷へ帰って、そこに敷いてある布団の上に横になった。病後の私は季節に不相当な黒八丈の襟のかかった銘仙のどてらを着ていた。私はそれを脱ぐのが面倒だから、そのまま仰向に寝て、手を胸の上で組み合せたなり黙って天井を見つめていた。

## 五

翌朝書齋の縁に立って、初秋の庭の面を見渡した時、私は偶然また彼の白い姿を苔の上に認めた。私は昨夕の失望を繰り返すのが厭さに、わざと彼の名を呼ばなかった。けれども立ったなりじつと彼の様子を見守らずにはいられなかった。彼は立木の根方に据えつけた石の手水鉢の中に首を突き込んで、そこに溜っている雨水をぴちゃぴちゃ飲んでいた。

この手水鉢はいつ誰が持つて来たとも知れず、裏庭の隅に転がっていたのを、引越した当時植木屋に命じて今の位置に移させた六角形のもので、その頃は苔が一面に生えて、側面に刻みつけた文字も全く読めないようになっていた。しかし私には移す前一度

判然とそれを読んだ記憶があつた。そうしてその記憶が文字として頭に残らないで、変な感情としていまだに胸の中を往来していた。そこには寺と仏と無常の句が漂つていた。

ヘクトーは元氣なさそうに尻尾を垂れて、私の方へ背中を向けていた。手水鉢を離れた時、私は彼の口から流れる垂涎を見た。

「どうかしてやらないといけない。病氣だから」と云つて、私は看護婦を顧みた。私はその時まで看護婦を使つていたのである。

私は次の日も木賊の中に寝ている彼を一目見た。そうして同じ言葉を看護婦に繰り返した。しかしヘクトーはそれ以来姿を隠したぎり再び宅へ歸つて来なかつた。

「医者へ連れて行こうと思つて、探したけれどもどこにもおりません」

家のものはこう云つて私の顔を見た。私は黙つていた。しかし腹の中では彼を貰い受けた当時の事さえ思い起された。届書を出す時、種類という下へ混血児と書いたり、色という字の下へ赤斑と書いた滑稽も微かに胸に浮んだ。

彼がいなくなつて約一週間も経つたと思う頃、一二丁隔つたある人の家から下女が使に來た。その人の庭にある池の中に犬の死骸が浮いているから引き上げて頸輪を改ため

て見ると、私の家の名前が彫りつけてあったので、知らせに来たというのである。下女は「こちらで埋めておきましようか」と尋ねた。私はすぐ車夫をやつて彼を引き取らせ  
た。

私は下女をわざわざ寄こしてくれた宅がどこにあるか知らなかった。ただ私の小供の時分から覚えていた古い寺の傍だろ**う**とばかり考えていた。それは山鹿素行の墓のある寺で、山門の手前に、旧幕時代の記念のように、古い榎が一本立っているのが、私の書齋の北の縁から数多の屋根を越してよく見えた。

車夫は筵の中にヘクトーの死骸を包んで帰つて来た。私はわざとそれに近づかなかつた。白木の小さい墓標を買つて来さして、それへ「秋風の聞えぬ土に埋めてやりぬ」という一句を書いた。私はそれを家のものに渡して、ヘクトーの眠っている土の上に建てさせた。彼の墓は猫の墓から東北に当**つて**、ほぼ一間ばかり離れているが、私の書齋の、寒い日の照らない北側の縁に出て、硝子戸の**うち**から、霜に荒された裏庭を覗くと、二つともよく見える。もう薄黒く朽ちかけた猫のに比べると、ヘクトーのはまだ生々しく光っている。しかし間もなく二つとも同じ色に古びて、同じく人の眼につかなくなるだろう。

私はその女に前後四五回会った。

始めて訪ねられた時私は留守であつた。取次のものが紹介状を持って来るように注意したら、彼女は別にそんなものを貰う所がないといつて歸つて行つたそうである。

それから一日ほど経つて、女は手紙で直接に私の都合を聞き合せに來た。その手紙の封筒から、私は女がつい眼と鼻の間に住んでいる事を知つた。私はすぐ返事を書いて面会日を指定してやつた。

女は約束の時間を違えず來た。三つ柏の紋のついた派出な色の縮緬の羽織を着ているのが、一番先に私の眼に映つた。女は私の書いたものをたいてい読んでゐるらしくかつた。それで話は多くそちらの方面へばかり延びて行つた。しかし自分の著作について初見の人から賛辞ばかり受けているのは、ありがたいようではなはだこそばゆいものである。實をいうと私は辟易した。

一週間おいて女は再び來た。そうして私の作物をまた賞めてくれた。けれども私の心はむしろそういう話題を避けたがつていた。三度目に來た時、女は何かに感激したもの



と見えて、袂たもとから手帛ハンケチを出して、しきりに涙を拭ぬぐった。そうして私に自分のこれまで経過して来た悲しい歴史を書いてくれないかと頼んだ。しかしその話を聴かない私には何という返事も与えられなかった。私は女に向つて、よし書くにしたところで迷惑を感じる人が出て来はしないかと訊きいて見た。女は存外判然はつきりした口調で、実名じつみょうさえ出さなければ構わないと答えた。それで私はとにかく彼女の経歴を聴きくために、とくに時間を拵こしらへた。

するとその日になつて、女は私に会いたいという別の女の人を連れて来て、例の話はこの次に延ばして貰もらいたいと云った。私には固もつより彼女の違約を責める気はなかった。二人を相手に世間話をして別れた。

彼女が最後に私の書齋すわに坐すわったのはその次の日の晩であつた。彼女は自分の前に置かれた桐きりの手焙てあぶりの灰を、真鍮しんちゆうの火箸ひばしで突つつきながら、悲しい身の上話を始める前、黙もくっている私にこう云った。

「この間は昂奮かうふんして私の事を書いていただきたくように申し上げましたが、それは止やめに致します。ただ先生に聞いていただくだけにしておきますから、どうかそのおつもりで……」

私はそれに対してこう答えた。

「あなたの許諾を得ない以上は、たといどんなに書きたい事柄ことからが出て来てもけつして書く気遣きづかいはありませんから御安心なさい」

私が充分な保証を女に与えたので、女はそれではと云つて、彼女の七八年前からの経歴を話し始めた。私は黙然もくねんとして女の顔を見守っていた。しかし女は多く眼を伏せて火鉢ちの中ばかり眺めていた。そうして綺麗きれいな指で、真鍮の火箸を握つては、灰の中へ突き刺した。

時々腑ふに落ちないところが出てくると、私は女に向つて短かい質問をかけた。女は単簡かんにまた私の納得なっとくできるように答をした。しかしたいは自分一人で口を利きいていたので、私はむしろ木像のようにじつとしているだけであつた。

やがて女の頬は熱ほてつて赤くなつた。白粉おしろいをつけていないせいか、その熱つた頬の色が著るしく私の眼に着いた。俯向うつむきになつていたので、たくさんある黒い髪の毛も自然私の注意を惹ひく種になつた。

女の告白は聴いている私を息苦しくしたくらいに悲痛を極めたものであった。彼女は私に向ってこんな質問をかけた。――

「もし先生が小説を御書きになる場合には、その女の始末をどうなさいますか」  
私は返答に窮した。

「女の死ぬ方がいいと御思いになりますか、それとも生きているように御書きになりますか」

私はどちらにでも書けると答えて、暗に女の気色をうかがった。女はもつと判然した挨拶を私から要求するように見えた。私は仕方なしにこう答えた。――

「生きるという事を人間の中心点として考えれば、そのままに置いて差支ないでしょう。しかし美しいものや気高いものを一義において人間を評価すれば、問題が違ってくるかも知れません」

「先生はどちらを御扱ひになりますか」

私はまた躊躇した。黙って女のいう事を聞いているよりほかに仕方がなかった。

「私は今持っているこの美しい心持が、時間というもののためにだんだん薄れて行くのが怖くってたまらないのです。この記憶が消えてしまつて、ただ漫然と魂の抜殻のよう

に生きている未来を想像すると、それが苦痛で苦痛で恐ろしくつてたまらないのです」  
私は女が今広い世間せかいの中にたった一人立って、一寸も身動きのできない位置にいる事を知っていた。そうしてそれが私の力でどうする訳にも行かないほどに、せつぱつまつた境遇である事も知っていた。私は手のつけようのない人の苦痛を傍観する位置に立たせられてじつとしていた。

私は服薬の時間を計るため、客の前も憚はばからず常に袂時計たもとどけいを座蒲団ざぶとんの傍わきに置く癖くせをもっていた。

「もう十一時だから御帰りなさい」と私はしまいに女に云った。女は厭いやな顔もせず立ち上った。私はまた「夜が更ふけたから送って行つて上げましょう」と云つて、女と共に沓脱くつめぎに下りた。

その時美しい月が静かな夜を残くまる限なく照らしていた。往来へ出ると、ひっそりした土の上にひびく下駄げたの音はまるで聞こえなかった。私は懷手ふしやうでをしたまま帽子も被かぶらずに、女あとの後に跟ついて行つた。曲り角の所で女はちよつと会釈えしやくして、「先生に送っていただいてはもつたいのうございます」と云つた。「もつたない訳がありません。同じ人間です」と私は答えた。

次の曲り角へ来たとき女は「先生に送っていたくのは光榮でございます」とまた云った。私は「本当に光榮と思いますか」と真面目に尋ねた。女は簡単に「思います」とはつきり答えた。私は「そんなら死なずに生きていらつしやい」と云った。私は女がこの言葉をどう解釈したか知らない。私はそれから一丁ばかり行つて、また宅の方へ引き返したのである。

むせつぽいような苦しい話を聞かされた私は、その夜かえつて人間らしい好い心持を久しぶりに経験した。そうしてそれが尊とい文芸上の作物を読んだあとの気分と同じものだという事に気がついた。有樂座や帝劇へ行つて得意になつていた自分の過去の影法師が何となく浅ましく感ぜられた。

## 八

不愉快に充ちた人生をとぼとぼ辿りつつある私は、自分のいつか一度到着しなければならぬ死という境地について常に考えている。そうしてその死というものを生よりは楽なものだとばかり信じている。ある時はそれを人間として達し得る最上至高の状態だ

と思う事もある。

「死は生よりも尊たつとい」

こういう言葉が近頃では絶えず私の胸を往來おうらいするようになった。

しかし現在の私は今まのあたりに生きている。私の父ふ母ぼ、私の祖父そふ母ぼ、私の曾祖父そうそふ母ぼ、それから順次さかのに溯さかのぼって、百年、二百年、乃至千年万年の間に馴致じゆんちされた習慣を、私一代で解脱げだつする事ができないので、私は依然としてこの生に執着しやくしやくしているのである。

だから私の他に与ひとえる助言じよげんはどうしてもこの生の許す範圍内においてしなければすまないように思う。どういう風に生きて行くかという狭い区域のなかでばかり、私は人類いちにんの一人として他の人類の一人に向わなければならないと思う。すでに生の中に活動する自分を認め、またその生の中に呼吸する他人を認める以上は、互いの根本義はいかに苦しくてもいかに醜みにくくてもこの生の上に置かれたものと解釈するのが当り前であるから。

「もし生きているのが苦痛なら死んだら好いでしょう」

こうした言葉は、どんなに情なく世を觀みずる人の口からも聞き得ないだろう。医者などは安らかな眠に赴おもむこうとする病人に、わざと注射の針を立てて、患者の苦痛を一刻でも延ばす工夫を凝こらしている。こんな拷問ごうもんに近い所作しよさが、人間の徳義として許されて

いるのを見ても、いかに根強く我々が生の一字に執着しゅうちゃくしているかが解る。私はついにその人に死をすすめる事ができなかった。

その人はとても回復の見込みのつかないほど深く自分の胸を傷きずけられていた。同時にその傷が普通の人の経験にないような美しく思い出の種となつてその人の面おもてを輝きらやかしていた。

彼女はその美しいものを宝石のごとく大事に永久彼女の胸の奥に抱だき締しめていたがつた。不幸にして、その美しいものはとりも直さず彼女を死以上に苦しめる手傷てきずそのものであつた。二つの物は紙の裏表のごとくどうてい引き離はなせないのである。

私は彼女に向つて、すべてを癒いす「時」の流れに従したがつて下れと云つた。彼女はもしそうしたらこの大切な記憶がしだいに剥はげて行くだろうと嘆いた。

公平な「時」は大事な宝物たからものを彼女の手から奪うう代りに、その傷口もしだいに療治りょうちしてくれるのである。烈はげしい生の歓喜を夢のように暈ぼかしてしまふと同時に、今の歓喜に伴なう生々なまなましい苦痛くるつうも取り除のける手段を怠おこたらないのである。

私は深い恋愛に根ざしている熱烈な記憶を取り上げても、彼女の創口きずぐちから滴したたる血潮を「時」に拭ぬぐわしめようとした。いくら平凡でも生きて行く方が死ぬよりも私から見た彼

女には適當だったからである。

かくして常に生よりも死を尊たつじいと信じている私の希望と助言は、ついにこの不愉快に充みちた生というものを超越する事ができなかった。しかも私にはそれが実行上における自分を、凡庸ばんような自然主義者として証しょうこ拠立てたように見えてならなかった。私は今でも半信半疑の眼でじつと自分の心を眺めている。

## 九

私が高等学校にいた頃、比較的親しく交際つきあった友達の中にOという人がいた。その時分からあまり多くの朋友ほうゆうを持たなかった私には、自然Oと往来ゆききを繁しげくするような傾向があった。私はたいいてい一週に一度ぐらいの割で彼を訪ねた。ある年の暑中休暇などには、毎日欠かさず真砂町まさごちやうに下宿している彼を誘って、大川の水泳場まで行った。

Oは東北の人だから、口の利き方きかたに私などと違った鈍どんでゆったりした調子があった。そうしてその調子がいかにもよく彼の性質を代表しているように思われた。何度となく彼と議論をした記憶のある私は、ついに彼の怒おこったり激したりする顔を見る事ができず



にしまった。私はそれだけでも充分彼を敬愛に価する長者として認めていた。

彼の性質が鷹揚であるごとく、彼の頭脳も私よりは遙かに大きかった。彼は常に当時の私には、考えの及ばないような問題を一人で考えていた。彼は最初から理科へ入る目的をもっていながら、好んで哲学の書物などを繙いた。私はある時彼からスペンサーの第一原理という本を借りた事をいまだに忘れずにいる。

空の澄み切った秋日和などには、よく二人連れ立つて、足の向く方へ勝手な話をしながら歩いて行つた。そうした場合には、往来へ塀越に差し出た樹の枝から、黄色に染まった小さい葉が、風もないのに、はらはらと散る景色をよく見た。それが偶然彼の目に触れた時、彼は「あッ悟つた」と低い声で叫んだ事があつた。ただ秋の色の空に動くのを美しくいと観ずるよりほかに能のない私には、彼の言葉が封じ込められた或秘密の符徴として怪しい響を耳に伝えるばかりであつた。「悟りというものは妙なものだ」と彼はその後から平生のゆつたりした調子で独言のように説明した時も、私には一口の挨拶もできなかった。

彼は貧生であつた。大観音の傍に間借をして自炊していた頃には、よく干鰯を焼いて佗びしい食卓に私を着かせた。ある時は餅菓子のだりに煮豆を買つて来て、竹の皮のま

ま双方から突つつき合った。

大学を卒業すると間もなく彼は地方の中学に赴任した。私は彼のためにそれを残念に思った。しかし彼を知らない大学の先生には、それがむしろ当然と見えたかも知れない。彼自身は無論平気であった。それから何年かの後に、たしか三年の契約で、支那のある学校の教師に雇われて行ったが、任期が充ちて帰るとすぐまた内地の中学校長になった。それも秋田から横手に遷されて、今では樺太の校長をしているのである。

去年上京したついでに久しぶりで私を訪ねてくれた時、取次のものから名刺を受取った私は、すぐその足で座敷へ行つて、いつもの通り客より先に席に着いていた。すると廊下伝に室の入口まで来た彼は、座蒲団の上にきちんと坐っている私の姿を見るや否や、「いやに澄ましているな」と云った。

その時向の言葉が終るか終わらないうちに「うん」という返事がいつか私の口を滑つて出てしまった。どうして私の悪口を自分で肯定するようなこの挨拶が、それほど自然に、それほど雑作なく、それほど拘泥わずに、するすると私の咽喉を滑り越したものであろうか。私はその時透明な好い心持がした。

向い合つて座を占めたOと私とは、何より先に互の顔を見返して、そこにまだ昔むかしのままの面影おもかげが、懐かしい夢の記念のように残っているのを認めた。しかしそれはあたかも古い心が新しい気分の中にぼんやり織り込まれていると同じ事で、薄暗く一面に霞かすんでいた。恐ろしい「時」の威力に抵抗して、再びもとの姿に返る事は、二人にとつても不可能であつた。二人は別れてから今会うまでの間に挟はさまっている過去という不思議なものを顧かえりみない訳に行かなかつた。

Oは昔し林檎りんごのように赤い頬と、人一倍大きな丸い眼と、それから女に適したほどふつくりした輪廓りんかくに包まれた顔をもっていた。今見てもやはり赤い頬と丸い眼と、同じく骨張らない輪廓の持主ではあるが、それが昔しとはどこか違っている。

私は彼に私の口髭くちひげと揉もみ上げを見せた。彼はまた私のために自分の頭を撫なでて見せた。私のは白くなって、彼のは薄く禿はげかかっているのである。

「人間も樺太かばふとまで行けば、もう行く先はなकारうな」と私が調戯からかうと、彼は「まあそんなものだ」と答えて、私のまだ見た事のない樺太の話をつらつらして聞かせた。しかし

私は今それをみんな忘れてしまった。夏は大変好い所だという事を覚えているだけである。

私は幾年ぶりかで、彼といっしょに表へ出た。彼はフロックの上へ、とんびのような外套がいとうをぶわぶわに着ていた。そうして電車の中で釣革つりかわにぶら下りながら、隠袋かくしから手帛ハンケチに包んだものを出して私に見せた。私は「なんだ」と訊きいた。彼は「栗饅頭くりまんじゅうだ」と答えた。栗饅頭は先刻さつき彼が私の宅うちにいた時に出した菓子であった。彼がいつの間に、それを手帛に包んだろうかと考えた時、私はちよつと驚かされた。

「あの栗饅頭を取って来たのか」

「そうかも知れない」

彼は私の驚いた様子を馬鹿にするような調子でこう云ったなり、その手帛ハンケチの包をまた隠袋かくしに収めてしまった。

我々はその晩帝劇へ行った。私の手に入れた二枚の切符に北側から入れという注意が書いてあったのを、つい間違えて、南側へ廻ろうとした時、彼は「そつちじゃないよ」と私に注意した。私はちよつと立ち留まって考えた上、「なるほど方角は樺太かばふとの方が確たしかなようだ」と云いながら、また指定された入口の方へ引き返した。

彼は始めから帝劇を知っていると云っていた。しかし晩餐を済ました後で、自分の席へ帰ろうとするとき、誰でもやる通り、二階と一階の扉を間違えて、私から笑われた。折々隠袋から金縁の眼鏡を出して、手に持った摺物を読んで見る彼は、その眼鏡を除さずに遠い舞台を平気で眺めていた。

「それは老眼鏡じゃないか。よくそれで遠い所が見えるね」

「なにチャブドーだ」

私にはこのチャブドーという意味が全く解らなかった。彼はそれを大差なしという支那語だと云って説明してくれた。

その夜の帰りに電車の中で私と別れたぎり、彼はまた遠い寒い日本の領地の北の端れに行ってしまった。

私は彼を想い出すたびに、達人という彼の名を考える。するとその名がとくに彼のために天から与えられたような心持になる。そうしてその達人が雪と氷に鎖ざされた北の果に、まだ中学校長をしているのだと思う。

ある奥さんがある女の人を私に紹介した。

「何か書いたものを見ていただきたいのだそうでございます」

私は奥さんのこの言葉から、頭の中でいろいろの事を考えさせられた。今まで私の所へ自分の書いたものを読んでくれと云つて来たものは何人となくある。その中には原稿紙の厚さで、一寸または二寸ぐらいの嵩になる大部のものも交つていた。それを私は時間の都合の許す限りなるべく読んだ。そうして簡単な私はただ読みさえすれば自分の頼まれた義務を果したものと心得て満足していた。ところが先方では後から新聞に出してくれと云つたり、雑誌へ載せて貰いたいと頼んだりするのが常であつた。中には他に読ませるのは手段で、原稿を金に換えるのが本来の目的であるように思われるのも少なくはなかつた。私は知らない人の書いた読みにくい原稿を好意的に読むのがだんだん厭になつて来た。

もつとも私の時間に教師をしていた頃から見ると、多少の弾力性ができてきたには相違なかつた。それでも自分の仕事にかかれば腹の中はずいぶん多忙であつた。親切づくで見てやろうと約束した原稿すら、なかなか埒のあかない場合もないとは限らなかつた。

私は私の頭で考えた通りの事をそのまま奥さんに話した。奥さんはよく私のいう意味を領解して帰って行った。約束の女が私の座敷へ来て、座蒲団ざぶとんの上に坐ったのはそれから間もなくであった。佻びしい雨わが今にも降り出しそうな暗い空を、硝子戸ガラスど越に眺めながら、私は女にこんな話をした。――

「これは社交ではありません。御互に体裁ていさいの好い事ばかり云い合っていては、いつまで経たったって、啓発きはつされるはずも、利益を受ける訳もないのです。あなたは思い切って正直にならなければ駄目だめですよ。自分さえ充分に開放して見せれば、今あなたがどこに立ってどっちを向いているかという實際が、私によく見えて来るのです。そうした時、私は始めてあなたを指導する資格を、あなたから与えられたものと自覚よしても宜しいのです。だから私が何か云ったら、腹に答えべき或物かを持っている以上、けっして黙もっていてはいけません。こんな事を云ったら笑われはしまいか、恥かを搔かきはしまいか、または失礼だといって怒られはしまいかなどと遠慮えんよして、相手に自分という正体を黒く塗り潰つぶした所ばかり示す工夫くふうをするならば、私がいくらあなたに利益を与えようと焦慮あせつても、私の射る矢はことごとく空矢あだやになってしまっただけです。

「これは私のあなたに対する注文ですが、その代り私の方でもこの私というものを隠し

は致しません。ありのままを曝<sup>さら</sup>け出すよりほかに、あなたを教える途<sup>みち</sup>はないのです。だから私の考えのどこかに隙<sup>すき</sup>があつて、その隙をもしあなたから見破<sup>おち</sup>られたら、私はあなたに私の弱点を握<sup>にぎ</sup>られたという意味で敗北の結果に陥<sup>おち</sup>るのです。教を受ける人だけが自分を開放する義務をもっていると思うのは間違<sup>まちが</sup>つています。教える人も己<sup>おの</sup>れをあなたの前に打ち明けるのです。双方とも社交を離れて勘<sup>かん</sup>破<sup>ぱ</sup>し合うのです。

「そういう訳で私はこれからあなたの書いたものを拝見する時に、ずいぶん手ひどい事を思い切つて云うかも知れませんが、しかし怒つてはいけません。あなたの感情を害するためにはいいのではないのですから。その代りあなたの方でも腑<sup>ふ</sup>に落ちない所があつたらどこまでも切り込んでいらつしやい。あなたが私の主意を了解している以上、私はけつして怒るはずはありませんから。

「要するにこれはただ現状維持を目的として、上滑<sup>うわすべ</sup>りな円滑を主位に置く社交とは全く別物なのです。解りましたか」

女は解つたと云つて歸つて行つた。



私に短冊たんざくを書けの、詩を書けのと云つて来る人がある。そうしてその短冊やら続めづやらをまだ承諾もしないうちに送つて来る。最初のうちはせつかくの希望を無にするのも気の毒だという考から、拙ますい字とは思いながら、先方の云うなりになって書いていた。けれどもこうした好意は永續しにくいものと見えて、だんだん多くの人の依頼を無にするような傾向が強くなつて来た。

私はすべての人間を、毎日毎日恥を搔かくために生れてきたものだと思へる事もあ  
るのだから、変な字を他ひとに送つてやるくらいしよさの所作は、あえてしようと思へば、やれな  
いとも限らないのである。しかし自分が病氣のとき、仕事の忙がしい時、またはそんな  
真似まねのしたくない時に、そういう注文が引き続いて起つてくると、實際弱らせられる。  
彼らの多くは全く私の知らない人で、そうして自分達の送つた短冊を再び送り返すこ  
ちの手数てすうさえ、まるで眼中に置いていないように見えるのだから。

そのうちで一番私を不愉快にしたのは播州はんしゅうの坂越さこしにいる岩崎という人であつた。この  
人は数年前よく端書はがきで私に俳句を書いてくれと頼んで来たから、その都度つど向うのいう通  
り書いて送つた記憶のある男である。その後の事のちであるが、彼はまた四角な薄い小包を  
私に送つた。私はそれを開けるのさえ面倒だつたから、ついそのままにして書斎へ放ほうり

出しておいたら、下女が掃除をする時、つい書物と書物の間へ挟み込んで、まず体よくしまい失くした姿にしまつた。

この小包と前後して、名古屋から茶の缶が私宛で届いた。しかし誰が何のために送つたものかその意味は全く解らなかつた。私は遠慮なくその茶を飲んでしまつた。するとほどなく坂越の男から、富士登山の画を返してくれと云つてきた。彼からそんなものを貰つた覚のない私は、打ちやつておいた。しかし彼は富士登山の画を返せ返せと三度も四度も催促してやまない。私はついにこの男の精神状態を疑い出した。「大方氣違だらう。」私は心の中でこうきめたなり向うの催促にはいっさい取り合わない事にした。

それから二三カ月経つた。たしか夏の初の頃と記憶しているが、私はあまり乱雑に取り散らされた書齋の中に坐つてゐるのがうつとうしくなつたので、一人でぼつぼつそこいらを片づけ始めた。その時書物の整理をするため、好い加減に積み重ねてある字引や参考書を、一冊ずつ改めて行くと、思いがけなく坂越の男が寄こした例の小包が出て来た。私は今まで忘れていたものを、眼のあたり見て驚ろいた。さっそく封を解いて中を調べたら、小さく畳んだ画が一枚入つていた。それが富士登山の図だったので、私はまた吃驚した。

包のなかにはこの画のほかに手紙が一通添えてあつて、それに画の賛をしてくれという依頼と、御礼に茶を送るという文句が書いてあつた。私はいよいよ驚ろいた。

しかしその時の私はどうてい富士登山の図などに賛をする勇氣をもっていなかった。私の気分が、そんな事とは遙か懸け離れた所にあつたので、その画に調和するような俳句を考えている暇がなかったのである。けれども私は恐縮した。私は丁寧な手紙を書いて、自分の怠慢を謝した。それから茶の御礼を云つた。最後に富士登山の図を小包にして返した。

### 十三

私はこれで一段落ついたものと思つて、例の坂越の男の事を、それぎり念頭に置かなかつた。するとその男がまた短冊を封じて寄こした。そうして今度は義士に關係のある句を書いてくれというのである。私はそのうち書こうと云つてやつた。しかしなかなか書く機会が来なかつたので、ついそのままになつてしまつた。けれども執濃いこの男の方ではけつしてそのままに済ます氣はなかつたものと見えて、むやみに催促を始め出し

た。その催促は一週に一遍か、二週に一遍の割できつと来た。それが必ず端書はがきに限って  
いて、その書き出しには、必ず「拝啓失敬申し候えども」とあるにきまっていた。私は  
その人の端書を見るのがだんだん不愉快になつて来た。

同時に向うの催促も、今まで私の予期していなかつた変な特色を帯びるようになった。  
最初には茶をやつたではないかという言葉が見えた。私がそれに取り合わずにいる  
と、今度はあの茶を返してくれという文句に改たまつた。私は返す事はたやすいが、そ  
の手数てかずが面倒だから、東京まで取りに来れば返してやると云つてやりたくなつた。けれ  
ども坂越の男にそういう手紙を出すのは、自分の品格かかに関わるような気がしてあえてし  
切れなかつた。返事を受け取らない先方はなおの事催促をした。茶を返さないならそれ  
でも好いから、金一円をその代価として送つて寄せといふのである。私の感情はこの  
男に對してしだいに荒すさんで来た。しまいにはとうとう自分を忘れるようになった。茶は  
飲んでしまった、短冊は失なくしてしまった、以来端書を寄こす事はいつさい無用である  
と書いてやつた。そうして心のうちで、非常に苦にがしい気分を経験した。こんな非紳士  
的な挨拶あいさつをしなければならぬような穴の中へ、私を追い込んだのは、この坂越の男で  
あると思つたからである。こんな男のために、品格にもせよ人格にもせよ、幾分の墮落

を忍ばなければならぬのかと考えると情なかつたからである。

しかし坂越の男は平氣であつた。茶は飲んでしまい、短冊は失くしてしまふとは、余りと申せば……とまた端書に書いて來た。そうしてその冒頭には依然として拜啓失敬申し候えどもという文句が規則通り繰り返されていた。

その時私はもうこの男には取り合うまいと決心した。けれども私の決心は彼の態度に對して何の効果のあるはずはなかつた。彼は相變らず催促をやめなかつた。そうして今度は、もう一度書いてくれば、また茶を送つてやるがどうだと云つて來た。それから事いやくも義士に關するのだから、句を作つても好いだらうと云つて來た。

しばらく端書が中絶したと思うと、今度はそれが封書に變つた。もつともその封筒は区役所などで使う極めて安い鼠色ねずみいろのものであつたが、彼はわざとそれに切手を貼はらないのである。その代り裏に自分の姓名も書かずに投函とうかんしていた。私はそれがために、倍の郵税を二度ほど払わせられた。最後に私は配達夫に彼の氏名と住所とを教えて、封のまゝ先方へ逆送して貰つた。彼はそれで六錢取られたせいか、ようやく催促を断念したらしい態度になつた。

ところが二カ月ばかり経つて、年が改まると共に、彼は私に普通の年始状を寄こし

た。それが私をちよつと感心させたので、私はつい短冊へ句を書いて送る氣になつた。しかしその贈物は彼を満足させるに足りなかつた。彼は短冊が折れたとか、汚れたとか云つて、しきりに書き直しを請求してやまない。現に今年の正月にも、「失敬申し候えども……」という依頼状が七八日頃に届いた。

私がこんな人に出会つたのは生れて始めてである。

#### 十四

ついこの間昔し私の家へ泥棒の入つた時の話を比較的詳しく聞いた。

姉がまだ二人とも嫁づかず<sup>かた</sup>にいた時分の事だというから、年代にすると、多分私の生れる前後に当るのだらう、何しろ勤王とか佐幕とかいう荒々しい言葉の流行<sup>はや</sup>つたやかしい頃なのである。

ある夜一番目の姉が、夜中に小用に起きた後、手を洗うために、潜戸を開けると、狭い中庭の隅に、壁を押しつけるような勢で立っている梅の古木の根方が、かつと明るく見えた。姉は思慮をめぐらす暇もないうちに、すぐ潜戸を締めてしまつたが、締めたあ

とで、今目前に見た不思議な明るさをそこに立ちながら考えたのである。

私の幼心に映ったこの姉の顔は、いまだに思い起そうとすれば、いつでも眼の前に浮ぶくらい鮮かである。しかしその幻像はすでに嫁に行つて齒を染めたあとの姿であるから、その時縁側に立つて考えていた娘盛りの彼女を、今胸のうちに描き出す事はちよつと困難である。

広い額、浅黒い皮膚、小さいけれども明確した輪廓を具えている鼻、人並より大きい二重瞼の眼、それから御沢という優しい名、——私はただこれらを綜合して、その場合における姉の姿を想像するだけである。

しばらく立つたまま考えていた彼女の頭に、この時もしかすると火事じゃないかという懸念が起つた。それで彼女は思い切つてまた切戸を開けて外を覗こうとする途端に、一本の光る拔身が、闇の中から、四角に切つた潜戸の中へすうと出た。姉は驚いて身の後へ退いた。その隙に、覆面をした、龕灯提灯を提げた男が、拔刀のまま、小さい潜戸から大勢家の中へ入つて来たのだそうである。泥棒の人数はたしか八人とか聞いた。

彼らは、他を殺めるために来たのではないから、おとなしくしていてくれさえすれば、家のものに危害は加えない、その代り軍用金を借せと云つて、父に迫つた。父はな

いと断った。しかし泥棒はなかなか承知しなかった。今角かどの小倉屋こくらやという酒屋へ入って、そこで教えられて来たのだから、隠しても駄目だと云って動かなかった。父は不精ふしょう無性ぶしょうに、とうとう何枚かの小判を彼らの前に並べた。彼らは金額があまり少な過ぎると思つたものか、それでもなかなか帰ろうとしないので、今まで床の中に寝ていた母が、「あなたの紙入に入っているのもやつておしまいなさい」と忠告した。その紙入の中には五十両ばかりあったとかいう話である。泥棒が出て行つたあとで、「余計な事をいう女だ」と云つて、父は母を叱りつけたそうである。

その事があつて以来、私の家では柱を切り組きくみにして、その中へあり金を隠す方法を講じたが、隠すほどの財産もできず、また黒装束くろそうぞくを着けた泥棒も、それぎり来ないので、私の生長する時分には、どれが切組きりくみにしてある柱かまるで分らなくなつていた。

泥棒が出て行く時、「この家は大変締りしまの好い宅だうち」と云つて賞めたほそうだが、その締りの好い家を泥棒に教えた小倉屋の半兵衛さんの頭には、あくる日から擦り傷かすりきずがいくつとなくできた。これは金はありませんと断わるたびに、泥棒がそんなはずがあるものかと云つては、拔身の先でちよいちよい半兵衛さんの頭を突ツついたのである。それでも半兵衛さんは、「どうしても宅うちにはありません、裏の夏目さんにはたくさんある



から、あすこへいらっしやい」と強情を張り通して、とうとう金は一文も奪られずにしまった。

私はこの話を妻から聞いた。妻はまたそれを私の兄から茶受話に聞いたのである。

## 十五

私が去年の十一月学習院で講演をしたら、薄謝と書いた紙包を後から届けてくれた。立派な水引がかかっているの、それを除して中を改めると、五円札が二枚入っていた。私はその金を平生から気の毒に思っていた、或懇意な芸術家に贈ろうかしらと思つて、暗に彼の来るのを待ち受けていた。ところがその芸術家がまだ見えない先に、何か寄附の必要ができてきたりして、つい二枚とも消費してしまった。

一口でいうと、この金は私にとってけつして無用なものではなかったのである。世間の通り相場で、立派に私のために消費されたというよりほかに仕方がないのである。けれどもそれを他にやろうとまで思つた私の主観から見れば、そんなにありがたみの附着していない金には相違なかつたのである。打ち明けた私の心持をいうと、こうした御礼

を受けるより受けない時の方がよほど颯爽さっぱりしていた。

畔柳芥舟君くろやなぎかいしゅうが樗牛会ちよぎゅうかいの講演の事で見えた時、私は話のついでとして一通りその理由を述べた。

「この場合私は労力を売りに行ったのではない。好意づくで依頼に応じたのだから、向うでも好意だけで私に酬むくいたらよかろうと思う。もし報酬問題とする気なら、最初から御礼はいくらするが、来てくれるかどうかと相談すべきはずでしょう」

その時K君は納得なっとくできないといったような顔をした。そうしてこう答えた。

「しかしどうでしょう。その十円はあなたの労力を買ったという意味でなくって、あなたに対する感謝の意を表する一つの手段と見たら。そう見る訳には行かないのですか」  
「品物なら判然はつきりそう解釈もできるのですが、不幸にも御礼が普通営業的の売買ばいばいに使用する金なので、どっちとも取れるのです」

「どっちとも取れるなら、この際善意さいの方に解釈した方が好くはないでしょうか」  
私はもつともだとも思った。しかしまたこう答えた。

「私は御存じの通り原稿料で衣食しているくらいですから、無論富裕とは云えませんが、しかしどうかこうか、それだけで今日こんにちを過ごして行かれるのです。だから自分の職業以

外の事にかけては、なるべく好意的に人のために働いてやりたいという考えを持っています。そうしてその好意が先方に通じるのが、私にとつては、何よりも尊たうとい報酬なのです。したがって金などを受けると、私が人のために働いてやるという余地、——今の私にはこの余地がまた極めて狭いのです。——その貴重な余地を腐蝕ふじよくさせられたような心持になります」

K君はまだ私の云う事を肯うけがわない様子であつた。私も強情であつた。

「もし岩崎とか三井とかいう大富豪に講演を頼むとした場合に、後から十円の御礼を持って行くでしょうか、あるいは失礼だからと云つて、ただ挨拶あいさつだけにとどめておくでしょうか。私の考ではおそらく金銭は持つて行くまいと思うのですが」

「さあ」といっただけでK君は判然した返事を与えなかった。私にはまだ云う事が少し残っていた。

「己惚おのぼれかは知りませんが、私の頭は三井岩崎に比べるほど富んでいないにしても、一般学生よりはずっと金持に違いないと信じています」

「そうですとも」とK君は首肯うなずいた。

「もし岩崎や三井に十円の御礼を持って行く事が失礼ならば、私の所へ十円の御礼を

持つて来るのも失礼でしょう。それもその十円が物質上私の生活に非常な潤沢うるおひを与えるなら、またほかの意味からこの問題を眺める事もできるでしょうが、現に私はそれを他にやろうとまで思ったのだから。——私の現下の経済的生活は、この十円のために、ほとんど目に立つほどの影響を蒙まうらないのだから」

「よく考えて見ましょう」といったK君はにやにや笑いながら帰って行つた。

## 十六

宅うちの前のだらだら坂を下りると、一間ばかりの小川に渡した橋があつて、その橋向うのすぐ左側に、小さな床屋が見える。私はたった一度そこで髪を刈かつて貰つた事がある。

平生は白い金巾かなきんの幕で、硝子戸ガラスどの奥が、往来から見えないようにしてあるので、私はその床屋の土間に立つて、鏡の前に座を占めるまで、亭主の顔をまるで知らずにいた。亭主は私の入ってくるのを見ると、手に持った新聞紙を放り出はなしてすぐ挨拶あいさつをした。その時私はどうもどこかで会つた事のある男に違ないという気がしてならなかつた。そ

れで彼が私の後へ廻<sup>うしろ</sup>つて、鉢<sup>はちま</sup>をちよきちよき鳴らし出した頃を見計らつて、こつちから話を持ちかけて見た。すると私の推察通り、彼は昔<sup>むか</sup>し寺町の郵便局の傍<sup>そば</sup>に店を持つて、今と同じように、散髪を渡世<sup>とせ</sup>としていた事が解つた。

「高田の旦那<sup>だんな</sup>などにもだいぶ御世話になりました」

その高田というのは私の従兄<sup>いとこ</sup>なのだから、私も驚いた。

「へえ高田を知つてゐるのかい」

「知つてゐるどころじゃございません。始終<sup>しじゆうとく</sup>徳、徳、つて最<sup>ひ</sup>肩<sup>い</sup>にして下すつたもんです」  
彼の言葉遣<sup>づか</sup>いはこういう職人にしてはむしろ丁寧<sup>ていねい</sup>な方であつた。

「高田も死んだよ」と私がいうと、彼は吃驚<sup>びっくり</sup>した調子で「ヘッ」と声を揚げた。

「いい旦那でしたかね、惜しい事に。いつ頃<sup>ごろ</sup>御亡<sup>おな</sup>くなりになりました」

「なに、つい此間<sup>こないだ</sup>さ。今日で二週間になるか、ならないぐらいのものだろう」

彼はそれからこの死んだ従兄<sup>いとこ</sup>について、いろいろ覚えてゐる事を私に語つた末、「考えると早いもんですね旦那、つい昨日<sup>きのう</sup>の事としつきや思われないのに、もう三十年近くにもなるんですから」と云つた。

「あのそら求友亭<sup>きゆうゆうてい</sup>の横町にいらしてね、……」と亭主はまた言葉を継<sup>つ</sup>ぎ足した。

「うん、あの二階のある家だろう」

「ええ御二階がありましたつけ。あすこへ御移りになった時なんか、方々様ほうほうさまから御祝い物なんかあつて、大變御盛ごさかんでしたがね。それから後あとでしたつけか、行願寺ぎょうがんじの寺内じないへ御引越なすつたのは」

この質問は私にも答えられなかった。実はあまり古い事なので、私もつい忘れてしまったのである。

「あの寺内も今じゃ大變變つたようだね。用がないので、それからつい入つて見た事もないが」

「變つたの変わらないのつてあなた、今じゃまるで待合ばかりでさあ」

私は肴町さかなまちを通るたびに、その寺内へ入る足袋屋たびやの角の細い小路こうじの入口に、ごたごた掲かかげられた四角な軒灯の多いのを知っていた。しかしその数を勘定かんじようして見るほどの道楽氣も起らなかつたので、つい亭主のいう事には氣がつかずにいた。

「なるほどそう云えば誰たが袖そでなんて看板が通とりから見えるようだね」

「ええたくさんできましたよ。もつとも變るはずですね、考えて見ると。もうやがて三十年にもなろうと云うんですから。旦那も御承知の通り、あの時分は芸者屋つたら、寺

内にたった一軒しきや無かつたもんでさあ。東家あずまやつてね。ちょうどそら高田の旦那まんむの真ま向こうでしたろう、東家の御神灯ごじんとうのぶら下がっていたのは」

## 十七

私はその東家をよく覚えていた。従兄いとこの宅うちのついで向むこうなので、両方のものが入り出ではいりのた  
びに、顔を合わせさえすれば挨拶あいさつをし合うぐらいの間柄あいだがらであつたから。

その頃従兄の家には、私の二番目の兄がごろごろしていた。この兄は大の放蕩ほうとうもの  
で、よく宅の懸物かけものや刀剣類を盗み出しては、それを二束三文に売り飛ばすという悪い癖くせ  
があつた。彼が何で従兄の家に転ころがり込んでいたのか、その時の私には解とらなかつたけ  
れども、今考えると、あるいはそうした乱暴を働うらいた結果、しばらく家うちを追ひ出され  
ていたかも知れないと思う。その兄のほかに、まだ庄さんという、これも私の母方の従  
兄に当る男が、そこいらにぶらぶらしていた。

こういう連中がいつでも一つ所に落ち合つては、寝そべったり、縁側えんがわへ腰をかけたり  
して、勝手な出放題を並べていると、時々向うの芸者屋の竹格子たけこうしの窓から、「今日は」

などと声をかけられたりする。それをまた待ち受けてでもいるごとくに、連中は「おいちよつとおいで、好东西のあるから」とか何とか云って、女を呼び寄せようとする。芸者の方でも昼間は暇だから、三度に一度は御愛嬌ごあいぎょうに遊びに来る。といった風の調子であつた。

私はその頃まだ十七八だつたろう、その上大変な羞恥屋はにかみやで通つていたので、そんな所に居合ひやうしわしても、何にも云わずに黙すみつて隅の方に引込ひっこんでばかりいた。それでも私は何かの拍子で、これらの人々といつしよに、その芸者屋へ遊びに行つて、トランプをした事がある。負けたものは何か奢おごらなければならぬので、私は人の買った寿司すしや菓子をだいぶ食つた。

一週間ほど経たつてから、私はまたこののらくらの兄に連れられて同じ宅へ遊びに行つたら、例の庄さんも席に居合ひやうしわせて話がだいぶはずんだ。その時咲松さきまつという若い芸者が私の顔を見て、「またトランプをしましょう」と云つた。私は小倉こくらの袴はかまを穿はいて四角張つていたが、懷中には一銭の小遣こづかいさえ無かつた。

「僕は銭ぜにがないから厭いやだ」

「好いわ、私わたしが持つてゐるから」



この女はその時眼を病んででもいたのだろう、こういいいい、綺麗な襦袢の袖でしきりに薄赤な二重瞼を擦っていた。

その後私は「御作が好い御客に引かされた」という噂を、従兄の家で聞いた。従兄の家では、この女の事を咲松と云わないで、常に御作御作と呼んでいたのである。私はその話を聞いた時、心の内でもう御作に会う機会も来ないだろうと考えた。

ところがそれからだいぶ経って、私が例の達人といっしよに、芝の山内の勧工場へ行ったら、そこでまたぱったり御作に出会った。こちらの書生姿に引き易えて、彼女はもう品の好い奥様に変っていた。旦那というのも彼女の傍にいた。……

私は床屋の亭主の口から出た東家という芸者屋の名前の奥に潜んでいるこれだけの古い事実を急に思い出したのである。

「あすここにいた御作という女を知ってるかね」と私は亭主に聞いた。

「知ってるどころか、ありや私の姪でさあ」

「そうかい」

私は驚ろいた。

「それで、今どこにいろのかね」

「御作は亡なくなりましたよ、旦那」

私はまた驚ろいた。

「いつ」

「いつって、もう昔の事になりますよ。たしかあれが二十三の年でしたろう」

「へええ」

「しかも浦塩ウラジオで亡くなったんです。旦那が領事館に關係のある人だったもんですから、あっちへいっしょに行きましてね。それから間もなくでした、死んだのは」

私は帰って硝子戸ガラスドの中に坐って、まだ死なずにいるものは、自分とあの床屋の亭主だけのような気がした。

## 十八

私の座敷へ通されたある若い女が、「どうも自分の周囲まわりがきちんと片づかないで困りますが、どうしたら宜よろしいものでしょう」と聞いた。

この女はある親戚の宅うちに寄寓きぐうしているので、そこが手狭てげまな上に、子供などが蒼蠅うるさいの

だろうと思った私の答は、すこぶる簡単であつた。

「どこかさっぱりした家うちを探して下宿でもしたら好いでしょう」

「いえ部屋の事ではないので、頭の中がきちんと片づかないで困るのです」

私は私の誤解を意識すると同時に、女の意味がまた解らなくなった。それでももう少し進んだ説明を彼女に求めた。

「外からは何でも頭の中に入つて来ますが、それが心の中心と折合がつかないのです」

「あなたのいう心の中心とはいいたいどんなものですか」

「どんなものと云つて、真直まっすぐな直線なのです」

私はこの女の数学に熱心な事を知っていた。けれども心の中心が直線だという意味は無論私に通じなかった。その上中心とはたして何を意味するのか、それもほとんど不可解であつた。女はこう云つた。

「物には何でも中心がございましょう」

「それは眼で見る事ができ、尺度ものさしで計る事のできる物体についての話でしょう。心にも形があるんですか。そんならその中心というものをここへ出して御覧なさい」

女は出せるとも出せないとも云わずに、庭の方を見たり、膝ひざの上で両手を擦すつたりし

ていた。

「あなたの直線というのは比喩たとえじゃありませんか。もし比喩なら、円まると云つても四角と云つても、つまり同じ事になるのですよう」

「そうかも知れませんが、形や色が始終しじゅう変っているうちに、少しも変わらないものが、どうしてもあるのです」

「その変わるものと変らないものが、別々だとすると、要するに心が二つある訳になりますが、それで好いのですか。変わるものはすなわち変らないものでなければならぬはずじゃありませんか」

こう云つた私はまた問題を元に返して女に向つた。

「すべて外界のものが頭のなかに入つて、すぐ整然と秩序なり段落なりがはつきりするように納まる人は、おそらくないでしょう。失礼ながらあなたの年齢としや教育や学問で、そうきちんと片づけられる訳がありません。もしかたそんな意味でなくつて、学問の力を借りずに、徹底的にどさりと納まりをつけたいなら、私のようなものの所へ来ても駄目だです。坊さんの所へでもいらつしやい」

すると女が私の顔を見た。

「私は始めて先生を御見上げ申した時に、先生の心はそういう点で、普通の人以上に整ととのつていらつしやるように思いました」

「そんなはずがありません」

「でも私にはそう見えました。内臓の位置までが調ととのつていらつしやるのでしょうか考えられませんでした」

「もし内臓がそれほど具合よく調節されているなら、こんなに始終病氣しじゅうなどはしません」

「私は病氣にはなりません」とその時女は突然自分の事を云った。

「それはあなたが私より偉い証拠しょうこです」と私も答えた。

女は蒲団ふとんを滑すべり下りた。そうして、「どうぞ御身体おからだを御大切に」と云って帰って行つた。

## 十九

私の旧宅は今私の住んでいる所から、四五町奥の馬場下という町にあった。町とは云

い条、その実小さな宿場としか思われなくらい、小供の時の私には、寂れ切つてかつ淋しく見えた。もともと馬場下とは高田の馬場の下にあるという意味なのだから、江戸絵図で見ても、朱引内か朱引外か分らない辺鄙な隅の方にあつたに違ないのである。

それでも内蔵造の家が狭い町内に三四軒はあつたろう。坂を上ると、右側に見える近江屋伝兵衛という薬種屋などはその一つであつた。それから坂を下り切つた所に、間口の広い小倉屋という酒屋もあつた。もつともこの方は倉造りではなかつたけれども、堀部安兵衛が高田の馬場で敵を打つ時に、ここへ立ち寄つて、枰酒を飲んで行つたという履歴のある家柄であつた。私はその話を小供の時分から覚えていたが、ついぞそこにしまつてあるという噂の安兵衛が口を着けた枰を見たことがなかつた。その代り娘の御北さんの長唄は何度となく聞いた。私は小供だから上手だか下手だかまるで解らなかつたけれども、私の宅の玄関から表へ出る敷石の上に立つて、通りへでも行こうとすると、御北さんの声がそこからよく聞こえたのである。春の日の午過などに、私はよく恍惚とした魂を、麗かな光に包みながら、御北さんの御浚いを聴くでもなく聴かぬでもなく、ぼんやり私の家の土蔵の白壁に身を靠たせて、佇立んでいた事がある。その御蔭で私はとうとう「旅の衣は篠懸の」などという文句をいつの間にか覚えてしまった。

このほかには棒屋が一軒あつた。それから鍛冶屋も一軒あつた。少し八幡坂の方へ寄つた所には、広い土間を屋根の下に囲い込んだやつちや場もあつた。私の家のものは、その主人を、問屋の仙太郎さんと呼んでいた。仙太郎さんは何でも私の父とごく遠い親類つづきになつてゐるんだとか聞いたが、交際からいうと、まるで疎濶であつた。往来で行き会ふ時だけ、「好い御天氣で」などと声をかけるくらいの間柄に過ぎなかつたらしく思われる。この仙太郎さんの一人娘が講釈師の貞水と好い仲になつて、死ぬの生きるのという騒ぎのあつた事も人聞に聞いて覚えてはいるが、纏まつた記憶は今頭のどこにも残つてゐない。小供の私には、それよりか仙太郎さんが高い台の上に腰をかけて、矢立と帳面を持つたまま、「いーやつちやいくら」と威勢の好い声で下にいる大勢の顔を見渡す光景の方がよつぽど面白かつた。下からはまた二十本も三十本もの手を一度に挙げて、みんな仙太郎さんの方を向きながら、ろんじだのがれんだのという符徴を、罵るようには呼び上げるうちに、薑や茄子や唐茄子の籠が、それらの節太の手で、どしどしどこかへ運び去られるのを見ているのも勇ましかつた。

どんな田舎へ行つてもありがちな豆腐屋は無論あつた。その豆腐屋には油の臭の染み込んだ縄暖簾がかかつていて門口を流れる下水の水が京都へでも行つたように綺麗だつ

た。その豆腐屋について曲ると半町ほど先に西閑寺せいかんじという寺の門が小高く見えた。赤く塗られた門の後うしろは、深い竹藪たけやぶで一面に掩おおわれているので、中にどんなものがあるか通りからは全く見えなかったが、その奥でする朝晩の御勤おつとめの鉦かねの音ねは、今でも私の耳に残っている。ことに霧きりの多い秋から木枯こからしの吹く冬へかけて、カンカンと鳴る西閑寺の鉦の音は、いつでも私の心に悲しくて冷つめたい或物たを叩たたき込むように小さい私の気分を寒くした。

## 二十

この豆腐屋の隣に寄席よせが一軒あったのを、私は夢幻ゆめうつのようにまだ覚えている。こんな場末ひとよせばに人寄場ひとよせばのあらうはずがないというのが、私の記憶かすみに霞をかけるせいだろう、私はそれを思い出すたびに、奇異な感じに打たれながら、不思議そうな眼を見張って、遠い私の過去をふり返るのが常である。

その席亭あるじの主人あるじというのは、町内の鳶頭とびがしらで、時々目暗縞めくらしまの腹掛に赤い筋の入った印袷しるしばん纏てんを着て、突っかけ草履ぞうりか何かでよく表を歩いていた。そこにまた御藤おふじさんという娘が



あつて、その人の容色きりようがよく家のものうちの口に上のぼつた事も、まだ私の記憶を離れずにいる。後のちには養子を貰もらつたが、それが口髭くちひげを生はやした立派な男だったので、私はちよつと驚ろかされた。御藤さんの方でも自慢の養子だという評判が高かつたが、後から聞いて見ると、この人はどこかの区役所の書記だとかいう話であつた。

この養子が来る時分には、もう寄席よせもやめて、しもうた屋やになつていたようであるが、私はその宅うちの軒先のきりにまだ薄暗い看板が淋さむしそうに懸かつていた頃、よく母から小遣こづかいを貰もらつてそこへ講釈を聞きに出かけたものである。講釈師の名前はたしか、南麟なんりんとかいつた。不思議な事に、この寄席へは南麟よりほかに誰も出なかつたようである。この男の家はどこにあつたか知らないが、どの見当けんとうから歩いて来るにしても、道普請みちぶしんができて、家並いへなみの揃そろつた今から見れば大事業に相違なかつた。その上客の頭数はいつでも十五か二十くらいなのだから、どんなに想像を逞たくましくしても、夢としか考えられないのである。「もうしもうし花魁おいらんえ、と云われて八ッ橋はしなんざますえとふり返る、途端とたんに切り込やいばむ刃やいばの光」という変な文句は、私がその時分南麟から教おすわつたのか、それとも後あとになつて落語家はなしかのやる講釈師の真似まねから覚えたのか、今では混雑してよく分らない。

当時私の家からまず町らしい町へ出ようとするには、どうしても人気のない茶畠ちやばたけと

か、竹藪<sup>たけやぶ</sup>とかまたは長い田圃路<sup>たんぼみち</sup>とかを通り抜けなければならなかった。買物らしい買物はたいてい神楽坂<sup>かぐらざか</sup>まで出る例になつていたので、そうした必要に馴<sup>な</sup>らされた私に、さした苦痛のあるはずもなかったが、それでも矢来<sup>やらい</sup>の坂を上<sup>あが</sup>つて酒井様の火<sup>ひ</sup>の見櫓<sup>みやぐら</sup>を通り越して寺町へ出ようという、あの五六町の一筋道などになると、昼でも陰森<sup>いんしん</sup>として、大空が曇<sup>くも</sup>つたように始終<sup>しじゅう</sup>薄暗<sup>はくあん</sup>かつた。

あの土手の上に二抱<sup>ふたかえ</sup>も三抱<sup>みかか</sup>えもあろうという大木が、何本となく並んで、その隙間<sup>すきま</sup>隙間をまた大きな竹藪<sup>たけやぶ</sup>で塞<sup>ふさ</sup>いでいたのだから、日の目を拝む時間と云つたら、一日のうちにおそらくただの一刻もなかったのだらう。下町へ行こうと思つて、日和<sup>ひより</sup>下駄<sup>げた</sup>などを穿<sup>は</sup>いて出ようものなら、きつと非道<sup>ひど</sup>い目にあうにきまつていた。あすこの霜融<sup>しもとけ</sup>は雨よりも雪よりも恐ろしいもののように私の頭に染<sup>し</sup>み込<sup>こ</sup>んでいる。

そのくらい不便な所でも火事の虞<sup>おそれ</sup>はあったものと見えて、やっぱり町の曲り角に高い梯子<sup>はしこ</sup>が立っていた。そうしてその上に古い半鐘も型のごとく釣<sup>つ</sup>るしてあった。私はこうしたありのままの昔をよく思い出す。その半鐘のすぐ下にあつた小さな一膳飯屋<sup>いちぜんめしや</sup>もおのずと眼先に浮<sup>う</sup>かんで来る。縄暖簾<sup>なわのれん</sup>の隙間からあたたかそうな煮<sup>に</sup>め<sup>め</sup>の香<sup>にお</sup>が煙<sup>けむり</sup>と共に往来へ流れ出して、それが夕暮<sup>もや</sup>の靄<sup>もや</sup>に融<sup>と</sup>け込んで行く趣<sup>おもむき</sup>なども忘れる事ができない。私が子規

のまだ生きているうちに、「半鐘と並んで高き冬木哉かな」という句を作ったのは、実はこの半鐘の記念のためであつた。

二十一

私の家に関する私の記憶は、惣そうじてこういう風に鄙ひなびている。そうしてどこかに薄ら寒い憐あわれな影を宿している。だから今生き残っている兄から、つい此間こないだ、うちの姉達が芝居に行った当時の様子を聴いた時には驚ろいたのである。そんな派出はでな暮しをした昔もあつたのかと思うと、私はいよいよ夢のような心持になるよりほかはない。

その頃の芝居小屋はみんな猿若町さるわかしやうにあつた。電車も俾へるまもない時分に、高田の馬場の下から浅草の観音様の先まで朝早く行き着したくこうと云うのだから、たいていの事ではなかつたらしい。姉達はみんな夜半よなかに起きて支度したくをした。途中が物騒ぶつそうだというので、用心のため、下男とこがきつと供ともをして行つたそうである。

彼らは筑土つくどを下りて、柿の木横町から揚場あげばへ出て、かねてその船宿にあつらえておいた屋根船に乗るのである。私は彼らがいかに予期みに充ちた心をもって、のろのろ砲兵ほうへいこ

工廠うしやうの前まへから御茶の水を通り越して柳橋まで漕こがれつつ行つただろうと想像する。しかも彼らの道中はけつしてそこで終りを告げる訳に行かないのだから、時間に制限をおかなかったその昔がなおさら回顧の種になる。

大川へ出た船は、流を溯さかのぼつて吾妻橋を通り抜けて、今戸いまどの有明楼ゆうめいろうの傍そばに着けたものだという。姉達はそこから上あがつて芝居茶屋まで歩いて、それからようやく設けの席につくべく、小屋へ送られて行く。設けの席というのは必ず高土間たかどまに限られていた。これは彼らの服装ななり顔なり、髪飾なりなりが、一般の眼によく着く便利のいい場所なので、派出所好む人達が、争つて手に入れたがるからであつた。

幕の間には役者に随ついてゐる男が、どうぞ楽屋へお遊びにいらつしやいまして云つて案内に来る。すると姉達はこの縮緬ちりめんの模様のある着物の上に袴はかまを穿はいた男の後に跟ついて、田之助たのすけとか訥升とつしようとかいう最前ひいきの役者の部屋へ行つて、扇子せんすに画えなどを描かいて貰かつて歸かへってくる。これが彼らの見栄みえだつたのだらう。そうしてその見栄は金の力でなければ買かえなかつたのである。

歸かへりには元来もとた路を同じ舟で揚場まで漕ぎ戻す。無要心ぶようじんだからと云つて、下男がまた提灯ちようちんを点つけて迎むかへに行く。宅うちへ着くのは今の時計で十二時くらいにはなるのだらう。だか

ら夜半よなかから夜半までかかつて彼らはようやく芝居を見る事ができたのである。……

こんな華麗はなやかな話を聞くと、私ははたしてそれが自分の宅に起った事か知らんと疑いたくなる。どこか下町の富裕な町家の昔を語られたような気もする。

もっとも私の家も侍分さむらいぶんではなかった。派出はでな付合つきあひをしなければならぬ名主なぬしという町人であつた。私の知っている父は、禿頭はげあたまの爺さんじいであつたが、若い時分には、一中節いちちゅうふしを習つたり、馴染なじみの女に縮緬ちりめんの積夜具つみやぐをしてやつたりしたのだそうである。青山に田地でんちがあつて、そこから上つて来る米だけでも、家のものが食うには不足がなかつたとか聞いた。現に今生き残っている三番目の兄などは、その米を舂つく音を始終しじゅう聞いたと云つてゐる。私の記憶によると、町内のものがみなして私の家と呼んで、玄関げんか玄関と称とえてゐた。その時分の私には、どういう意味か解らなかつたが、今考えると、式台のついた厳いめしい玄関付の家は、町内にたつた一軒しかなかつたからだろうと思う。その式台上つた所に、突棒つくぼうや、袖捌そでがらみや刺股さつまや、また古ぼけた馬上提灯ばじようなどが、並んで懸かけてあつた昔なら、私でもまだ覚えてゐる。

この二三年来私はたいてい年に一度ぐらいの割で病氣をする。そうして床<sup>とこ</sup>についてから床を上げるまでに、<sup>ひつぎ</sup>ほほ一月の<sup>ひかず</sup>日数を潰<sup>つぶ</sup>してしまふ。

私の病氣と云えば、いつもきまつた胃の故障なので、いざとなると、絶食療法よりほかに手の着けようがなくなる。医者<sup>いしや</sup>の命令ばかりか、病氣の性質そのものが、私にこの絶食を余儀なくさせるのである。だから病み始めより回復期に向つた時の方が、余計瘦<sup>や</sup>せこけてふらふらする。一カ月以上かかるのもおもにこの衰弱<sup>たふ</sup>が祟<sup>たた</sup>るからのように思われる。

私の立居<sup>たちい</sup>が自由になると、黒<sup>くろ</sup>梓<sup>わく</sup>のついた摺物<sup>すりもの</sup>が、時々私の机の上に載せられる。私は運命を苦笑する人のごとく、絹帽<sup>シルクハット</sup>などを被<sup>かぶ</sup>つて、葬式<sup>そうしき</sup>の供に立つ、俥<sup>くるま</sup>を驅<sup>か</sup>つて齋場<sup>さいじやう</sup>へ駈<sup>か</sup>けつける。死んだ人のうちには、御爺<sup>おや</sup>さんも御婆<sup>おば</sup>さんもあるが、時には私よりも年齒<sup>とし</sup>が若くつて、平生からその健康を誇つていた人も交<sup>まじ</sup>つてゐる。

私は宅へ歸つて机の前に坐つて、人間の寿命は実に不思議なものだと思ふ。多病な私はなぜ生き残つてゐるのだろうかと思ふ。あの人はどういう訳で私より先に死んだのだろうかと思ふ。

私としてこういう默想<sup>もくけ</sup>に耽<sup>ふけ</sup>るのはむしろ当然だといわなければならない。けれども自

分の位地<sup>いぢ</sup>や、身体<sup>からだ</sup>や、才能<sup>才能</sup>や——すべて己<sup>おの</sup>れというもののおり所を忘れがちな人間の一人<sup>にん</sup>として、私は死<sup>し</sup>なないのが当り前だと思<sup>おも</sup>いながら暮<sup>く</sup>らしている場合が多い。読経<sup>どきよう</sup>の間ですら、焼香の際ですら、死んだ仏のあとに生き残<sup>のこ</sup>った、この私という形骸<sup>けいがい</sup>を、ちつとも不思議と心得<sup>こころえ</sup>ずに澄<sup>は</sup>ましている事が常である。

或<sup>ある</sup>人が私に告<sup>つ</sup>げて、「他の死<sup>し</sup>ぬのは当り前のように見<sup>み</sup>えますが、自分が死<sup>し</sup>ぬという事だけはとても考<sup>かん</sup>えられません」と云<sup>い</sup>った事がある。戦争に出<sup>で</sup>た経験のある男に、「そんなに隊<sup>たい</sup>のものが続々<sup>たつたつ</sup>斃<sup>たお</sup>れるのを見<sup>み</sup>ていながら、自分だけは死<sup>し</sup>なないと思<sup>おも</sup>っていられますか」と聞<sup>き</sup>いたら、その人は「いられますね。おおかた死<sup>し</sup>ぬまでは死<sup>し</sup>なないと思<sup>おも</sup>つてるんです」と答<sup>こた</sup>えた。それから大学の理科に關<sup>かん</sup>係のある人に、飛行機<sup>ひこうき</sup>の話<sup>はなし</sup>を聴<sup>き</sup>かされた時に、こんな問<sup>もん</sup>答<sup>た</sup>をした覺<sup>かく</sup>えもある。

「ああして始<sup>はじめ</sup>終<sup>しゆう</sup>落<sup>らく</sup>ちたり死<sup>し</sup>んだりしたら、後<sup>あと</sup>から乗<sup>の</sup>るものは怖<sup>こわ</sup>いだろうね。今<sup>いま</sup>度はおれの番<sup>ばん</sup>だという氣<sup>き</sup>になりそうなものだが、そうでないかしら」

「ところがそうでないと見<sup>み</sup>えます」

「なぜ」

「なぜって、まるで反對<sup>はんたい</sup>の心理<sup>しんり</sup>状態<sup>じょうたい</sup>に支<sup>し</sup>配<sup>はい</sup>されるようになるらしいのです。ヤッぱりあ

いつは墜落して死んだが、おれは大丈夫だという気になると見えますね」

私も恐らくこういう人の気分で、比較的平気にしていられるのだろう。それもそのはずである。死ぬまでは誰しも生きているのだから。

不思議な事に私の寝ている間には、黒梶くろわくの通知がほとんど来ない。去年の秋にも病気が癒なおった後で、三四人の葬儀あはれに列したのである。その三四人の中に社の佐藤君も這入はいっていた。私は佐藤君がある宴会の席で、社から貰った銀盃ぎんぱいを持って来て、私に酒を勧めすすてくれた事を思い出した。その時彼の踊った変な踊もまだ覚えていて。この元気な倔強くつきやうな人の葬式むすいに行った私は、彼が死んで私が生残っているのを、別段の不思議とも思わずにいる時の方が多い。しかし折々考えると、自分の生きている方が不自然のような心持にもなる。そうして運命がわざと私を愚弄ぐろうするのではないかしらと疑いたくなる。

## 二十三

今私の住んでいる近所に喜久井町きくいちやうという町がある。これは私の生れた所だから、ほかの人よりもよく知っている。けれども私が家を出て、方々漂浪ひようろうして帰って来た時には、



その喜久井町がだいぶ広がって、いつの間にか根来ねしろの方まで延びていた。

私に縁故の深いこの町の名は、あまり聞き慣れて育ったせいか、ちつとも私の過去を誘い出す懐かしい響を私に与えてくれない。しかし書齋に独り坐ひとって、頬杖ほおづえを突いたまま、流れを下る舟のように、心を自由に遊ばせておくと、時々私の聯想れんそうが、喜久井町の四字にぱたりと出会ったなり、そこでしばらく低徊ていかいし始める事がある。

この町は江戸と云った昔には、多分存在していなかったものらしい。江戸が東京に改まった時か、それともずっと後のちになってからか、年代はたしかに分らないが、何でも私の父が拵ひしめえたものに相違ないのである。

私の家の定紋じようもんが井桁いげたに菊なので、それにちなんだ菊に井戸を使って、喜久井町としたという話は、父自身の口から聴いたのか、または他のものから教おすわったのか、何しろ今でもまだ私の耳に残っている。父は名主なぬしがなくなってから、一時区長という役を勤めていたので、あるいはそんな自由も利きいたかも知れないが、それを誇ほこりにした彼の虚栄心を、今になって考えて見ると、厭いやな心持は疾とくに消え去って、ただ微笑したくなるだけである。

父はまだその上に自宅の前から南へ行く時には是非共登らなければならない長い坂に、

自分の姓の夏目という名をつけた。不幸にしてこれは喜久井町ほど有名にならずに、ただの坂として残っている。しかしこの間、或人が来て、地図でこの辺の名前を調べたら、夏目坂というのがあったと云つて話したから、ことによると父の付けた名が今でも役に立っているのかも知れない。

私が早稲田<sup>わせだ</sup>に帰つて来たのは、東京を出てから何年ぶりになるだろう。私は今の住居<sup>すまい</sup>に移る前、家<sup>うち</sup>を探索する目的であつたか、また遠足の帰り路であつたか、久しぶりで偶然私の旧家の横へ出た。その時表から二階の古瓦<sup>ふるかわ</sup>が少し見えたので、まだ生き残っているのかしらと思つたなり、私はそのまま通り過ぎてしまった。

早稲田に移つてから、私はまたその門前を通つて見た。表から覗<sup>のぞ</sup>くと、何だかもとと変らないような氣もしたが、門には思いも寄らない下宿屋の看板が懸<sup>か</sup>つていた。私は昔の早稲田田圃<sup>たんぼ</sup>が見たかつた。しかしそこはもう町になっていた。私は根来<sup>ねごろ</sup>の茶畠<sup>ちやばたけ</sup>と竹藪<sup>たけやぶ</sup>を一目眺<sup>ひとめ</sup>めたかつた。しかしその痕迹<sup>こんせき</sup>はどこにも発見する事ができなかった。多分この辺だろうと推測した私の見当<sup>けんとう</sup>は、當っているのか、外<sup>はず</sup>れているのか、それさえ不明であつた。

私は茫然<sup>ぼうぜん</sup>として佇立<sup>ちよりつ</sup>した。なぜ私の家だけが過去の残骸<sup>ざんがい</sup>のごとくに存在しているのだ

ろう。私は心のうちで、早くそれが崩れてしまえば好いのにと思った。

「時」は力であった。去年私が高田の方へ散歩したついでに、何気なくそこを通り過ぎると、私の家は綺麗に取り壊されて、そのあとに新しい下宿屋が建てられつつあった。その傍には質屋もできていた。質屋の前に疎らな囲をして、その中に庭木が少し植えてあった。三本の松は、見る影もなく枝を刈り込まれて、ほとんど畸形児のようになっていたが、どこか見覚えのあるような心持を私に起させた。昔し「影参差松三本の月夜かな」と詠ったのは、あるいはこの松の事ではなかったろうかと考えつつ、私はまた家に帰った。

## 二十四

「そんな所に生い立って、よく今日まで無事にすんだものですね」

「まあどうかこうか無事にやって来ました」

私達の使った無事という言葉は、男女の間に起る恋の波瀾がないという意味で、云わば情事の反対を指したようなものであるが、私の追窮心は簡単なこの一句の答で満足で

きなかった。

「よく人が云いますね、菓子屋へ奉公すると、いくら甘いものの好きな男でも、菓子が厭いやになるって、御彼岸おひがしに御萩おはぎなどを拵こしらえているところを宅うちで見ても分るじゃありませんか、拵こしらえるものは、ただ御萩おはぎを御重おじゆうに詰めるだけで、もうげんなりした顔をしているくらいだから。あなたの場合もそんな訳なんですか」

「そういう訳でもないようです。とにかく廿歳はたち少し過ぎまでは平気でいたのですから」  
その人はある意味において好男子であつた。

「たといあなたが平気でいても、相手が平気でいない場合がないとも限らないじゃありませんか。そんな時には、どうしたって誘さそわれがちになるのが当り前でしょう」

「今からふり返って見ると、なるほどこういう意味でああいう事をしたのだとか、あんな事を云つたのだとか、いろいろ思い当る事がないでもありません」

「じゃ全く気がつかずにいたのですね」

「まあそうです。それからこちらで気のついたのも一つありました。しかし私の心はどうしても、その相手に惹ひきつけられる事ができなかったのです」

私はそれが話の終りかと思つた。二人の前には正月の膳ぜんが据すえてあつた。客は少しも

酒を飲まないし、私もほとんど盃さかずきに手を触れなかったから、献酬けんしゅうというものは全くなかった。

「それだけで今日まで経過して来られたのですか」と私は吸物をすすりながら念のために訊きいて見た。すると客は突然こんな話を私にして聞かせた。

「まだ使用人であった頃に、ある女と二年ばかり会っていた事があります。相手は無論素人しらうとではないのでした。しかしその女はもういないのです。首を縊くつて死んでしまったのです。年は十九でした。十日ばかり会わないでいるうちに死んでしまったのです。その女にはね、旦那だんなが二人あって、双方が意地いぢづくで、身受の金を競せり上げにかかったのです。それに双方共老妓を味方にして、こっちへ来い、あっちへ行くなと義理責ぎりぜめにもしたらしいのです。……」

「あなたはそれを救ってやる訳に行かなかったのですか」

「当時の私は丁稚でっちの少し毛の生はえたようなもので、とてもどうもできないのです」

「しかしその芸妓げいしやはあなたのために死んだのじゃありませんか」

「さあ……。一度に双方の旦那に義理を立てる訳に行かなかったからかも知れませんが。……しかし私ら二人の間に、どこへも行かないという約束はあったに違いないので

す」

「するとあなたが間接にその女を殺した事になるのかも知れませんね」

「あるいはそうかも知れません」

「あなたは寢覚ねざめが悪ありませんか」

「どうも好くないのです」

元日に込み合こあった私の座敷は、二日になって淋さびしいくらい静かであつた。私はその淋しい春の松の内に、こういう憐あわれな物語りを、その年賀の客から聞いたのである。客は真面目まじめな正直な人だったから、それを話すにも、ほとんど艶つやつぽい言葉を使わなかつた。

## 二十五

私がまだ千駄木にいた頃の話だから、年数にすると、もうだいぶ古い事になる。

或日私は切通きりとおしの方へ散歩した歸りに、本郷四丁目の角へ出る代りに、もう一つ手前の細い通りを北へ曲つた。その曲り角にはその頃あつた牛屋ぎゅうやの傍そばに、寄席よせの看板がいつ

でも懸<sup>か</sup>つていた。

雨の降る日だったので、私は無論傘<sup>かさ</sup>をさしていた。それが鉄御納戸<sup>てつおなんど</sup>の八間の深張<sup>はちけん</sup>で、上から洩<sup>も</sup>つてくる雫<sup>しずく</sup>が、自然木<sup>じねんぼく</sup>の柄<sup>え</sup>を伝わって、私の手を濡<sup>ぬ</sup>らし始めた。人通りの少ないこの小路<sup>こうじ</sup>は、すべての泥を雨で洗い流したように、足駄<sup>あしだ</sup>の齒<sup>は</sup>に引<sup>ひ</sup>つ懸<sup>か</sup>る汚<sup>きた</sup>ないものはほとんどなかった。それでも上を見れば暗く、下を見れば佗<sup>わ</sup>びしかった。始終<sup>しじゅう</sup>通りついているせいでもあろうが、私の周囲には何一つ私の眼を惹<sup>ひ</sup>くものは見えなかった。そうして私の心はよくこの天気とこの周囲に似ていた。私には私の心を腐蝕<sup>ふしょく</sup>するような不愉快<sup>ふげん</sup>な塊<sup>かたまり</sup>が常にあった。私は陰鬱<sup>いんうつ</sup>な顔をしながら、ぼんやり雨の降る中を歩いていた。

日蔭町<sup>ひかげちょう</sup>の寄席<sup>よせ</sup>の前まで来た私は、突然一台の幌俥<sup>ほろぐるま</sup>に出合った。私と俥の間には何の隔<sup>へだた</sup>りもなかった。私は遠くからその中に乗っている人の女だという事に気がついた。まだセルロイドの窓などのできない時分だから、車上の人は遠くからその白い顔を私に見せていたのである。

私の眼にはその白い顔が大変美しく映った。私は雨の中を歩きながらじつとその人の姿<sup>みと</sup>に見惚<sup>と</sup>れていた。同時にこれは芸者だろうという推察が、ほとんど事実のように、私の心に働<sup>はたら</sup>きかけた。すると俥が私の一問ばかり前へ来た時、突然私の見ていた美しい

人が、鄭寧ていねいな会釈えしやくを私にして通り過ぎた。私は微笑に伴なうその挨拶あいさつとともに、相手が、大塚楠緒さんであつた事に、始めて気がついた。

次に会つたのはそれから幾日いくかめ目だつたらうか、楠緒くすおさんが私に、「この間は失礼しました」と云つたので、私は私のありのままを話す氣になつた。

「実はどこの美しい方かたかと思つて見ていました。芸者じゃないかしらとも考えたのです」

その時楠緒さんが何と答えたか、私はたしかに覚えていないけれども、楠緒さんはちつとも顔を赧あからめなかつた。それから不愉快な表情も見せなかつた。私の言葉をただそのままに受け取つたらしく思われた。

それからずっと経たつて、ある日楠緒さんがわざわざ早稲田へ訪ねて来てくれた事がある。しかるにあいにく私は妻さいと喧嘩けんかをしていた。私は厭いやな顔をしたまま、書齋にじつと坐っていた。楠緒さんは妻と十分ばかり話をして歸つて行つた。

その日はそれですんだが、ほどなく私は西片町へ詫あやまりに出かけた。

「実は喧嘩をしていたのです。妻も定めて無愛想でしたらう。私はまた苦々にくにがしい顔を見せるのも失礼だと思つて、わざと引込ひっこんでいたのです」



これに対する楠緒さんの挨拶も、今では遠い過去になって、もう呼び出す事のできないほど、記憶の底に沈んでしまった。

楠緒さんが死んだという報知の来たのは、たしか私が胃腸病院にいる頃であった。死去の広告中に、私の名前を使って差支ないかと電話で問い合わせられた事などもまだ覚えている。私は病院で「ある程の菊投げ入れよ棺の中」という手向の句を楠緒さんのために咏んだ。それを俳句の好きなある男が嬉しがって、わざわざ私に頼んで、短冊に書かせて持って行ったのも、もう昔になってしまった。

## 二十六

益さんがどうしてそんなに零落たものか私には解らない。何しろ私の知っている益さんは郵便脚夫であった。益さんの弟の庄さんも、家を潰して私の所へ転がり込んで食客になっていたが、これはまだ益さんよりは社会的地位が高かった。小供の時分本町の鯛屋へ奉公に行っていた時、浜の西洋人が可愛がって、外国へ連れて行くと云ったのを断ったのが、今考えると残念などと始終話していた。

二人とも私の母方の従兄いとこに当る男だったから、その縁故で、益さんは弟おとこに会うため、また私の父に敬意を表するため、月に一遍ぐらいは、牛込の奥まで煎餅せんべいの袋などを手土産てみやげに持って、よく訪ねて来た。

益さんはその時何でも芝はすの外れか、または品川近くに世帯を持って、一人暮しの呑気のんきな生活を営んでいたらしいので、宅うちへ来るとよく泊まって行つた。たまに帰ろうとする、兄達が寄つてたかつて、「帰ると承知しないぞ」などと威嚇おどかしたものである。

当時二番目と三番目の兄は、まだ南校なんこうへ通つていた。南校というのは今の高等商業学校の位置にあつて、そこを卒業すると、開成学校すなわち今日こんにちの大学へ這入はいる組織そしよくになつていたものらしかった。彼らは夜になると、玄関きりに桐の机を並べて、明日あしたの下読したよみをする。下読と云つたところで、今の書生のやるのとはだいぶ違つていた。グードリツチの英国史といったような本を、一節ぐらいずつ読んで、それからそれを机の上へ伏せて、口の内くちで今読んだ通りを暗誦あんしやうするのである。

その下読が済むと、だんだん益さんが必要になつて来る。庄さんもいつの間にかそこへ顔を出す。一番目の兄も、機嫌きげんの好い時は、わざわざ奥から玄関まで出張でばつて来る。そうしてみんないっしょになつて、益さんに調戲からかい始める。

「益さん、西洋人の所へ手紙を配達する事もあるだろう」

「そりゃ商売だから厭いやだって仕方ありません、持って行きますよ」

「益さんは英語ができるのかね」

「英語ができるくらいならこんな真似まねをしちゃいけません」

「しかし郵便ツとか何とか大きな声を出さなくっちゃならないだろう」

「そりゃ日本語で間に合いますよ。異人だって、近頃は日本語が解りますもの」

「へええ、向むかでも何とか云うのかね」

「云いますとも。ペロリの奥さんなんか、あなたよろしいありがとう、ちゃんと日本語で挨拶あいさつをするくらいです」

みんなは益さんをここまでおびき出して置いて、どつと笑うのである。それからまた「益さん何て云うんだって、その奥さんは」と何遍も一つ事を訊きいては、いつまでも笑いの種にしようと巧たくらんでかかる。益さんもしまいには苦笑いをして、とうとう「あなたよろしい」をやめにしてしまう。すると今度は「じゃ益さん、野中のなかの一本杉いっぽんすぎをやつて御覧よ」と誰かが云い出す。

「やれつたって、そうおいそれとやれるもんじゃありません」

「まあ好いから、おやりよ。いよいよ野中の一本杉の所まで参りますと……」

益さんはそれでもやにやして応じない。私はとうとう益さんの野中の一本杉というものを聴かずにしまった。今考えると、それは何でも講釈か人情噺の一節じゃないかしらと思う。

私の成人する頃には益さんもう宅へ来なくなつた。おおかた死んだのだろう。生きていれば何か消息のあるはずである。しかし死んだにしても、いつ死んだのか私は知らない。

## 二十七

私は芝居というものに余り親しみが無い。ことに旧劇は解らない。これは古来からその方面で発達して来た演芸上の約束を知らないの、舞台の上に開展される特別の世界に、同化する能力が私に欠けているためだとも思う。しかしそればかりではない。私が旧劇を見て、最も異様に感ずるのは、役者が自然と不自然の間を、どっちつかずにぶらぶら歩いている事である。それが私に、中腰と云つたような落ちつけない心持を引き起

させるのも恐らく理の当然なのだろう。

しかし舞台の上に子供などが出て来て、甲の高い声で、憐れっぽい事などを云う時には、いかな私でも知らず知らず眼に涙が滲み出る。そうしてすぐ、ああ騙されたなど後悔する。なぜあんなに安っぽい涙を零したのだろうと思う。

「どう考えても騙されて泣くのは厭だ」と私はある人に告げた。芝居好のその相手は、「それが先生の常態なのでしょう。平生涙を控え目にしているのは、かえってあなたによそゆきじゃありませんか」と注意した。

私はその説に不服だったので、いろいろの方面から向を納得させようとしているうちに、話題がいつか絵画の方に滑って行つた。その男はこの間参考品として美術協会に出た若冲の御物を大變に嬉しがって、その評論をどこかの雑誌に載せるとかいふ噂であつた。私はまたあの鶏の図がすこぶる気に入らなかつたので、ここでも芝居と同じような議論が二人の間に起つた。

「いったい君に画を論ずる資格はないはずだ」と私はついに彼を罵倒した。するとこの一言が本になつて、彼は芸術一元論を主張し出した。彼の主意をかいつまんで云うと、すべての芸術は同じ源から湧いて出るのだから、その内の一つさえうんと腹に入れてお

けば、他は自<sup>おの</sup>ずから解し得られる理窟<sup>りくつ</sup>だというのである。座にいる人のうちで、彼に同意するものも少なくなかった。

「じゃ小説を作れば、自然柔道も旨<sup>うま</sup>くなるかい」と私が笑談<sup>じょうだん</sup>半分に云った。

「柔道は芸術じゃありませんよ」と相手も笑いながら答えた。

芸術は平等観から出立するのではない。よしそこから出立するにしても、差別<sup>さべつ</sup>観に入<sup>い</sup>って始めて、花が咲く<sup>さく</sup>のだから、それを本来の昔へ返せば、絵も彫刻も文章も、すっかり無に帰してしまふ。そこに何で共通のものがあろう。たとい有<sup>あ</sup>つたにしたところで、実際の役には立たない。彼我共通の具体的なものなどの発見もできるはずがない。こういうのがその時の私の論旨<sup>ろんし</sup>であつた。そうしてその論旨はけつして充分なものはなかつた。もつと先方の主張を取り入れて、周到な解釈を下<sup>くだ</sup>してやる余地はいくらでもあつたのである。

しかしその時座にいた一人<sup>いちにん</sup>が、突然私の議論を引き受けて相手に向い出したので、私も面倒だからついそのままにしておいた。けれども私の代りになったその男というのはだいぶ酔<sup>よ</sup>っていた。それで芸術がどうだの、文芸がどうだのと、しきりに弁<sup>わ</sup>ずるけれども、あまり要領を得た事は云わなかつた。言葉遣<sup>づか</sup>いさえ少しへべれけであつた。初めの

うちは面白がつて笑っていた人達も、ついには黙ってしまった。

「じゃ絶交しよう」などと酔った男がしまいに云い出した。私は「絶交するなら外でやってくれ、ここでは迷惑だから」と注意した。

「じゃ外へ出て絶交しようか」と酔った男が相手に相談を持ちかけたが、相手が動かないので、とうとうそれぎりになってしまった。

これは今年の元日の出来事である。酔った男はそれからちよいちよい来るが、その時の喧嘩については一口も云わない。

## 二十八

ある人が私の家の猫を見て、「これは何代目の猫ですか」と訊いた時、私は何気なく「二代目です」と答えたが、あとで考えると、二代目はもう通り越して、その実三代目になっていた。

初代は宿なしであったにかかわらず、ある意味からして、だいぶ有名になったが、それに引きかえて、二代目の生涯は、主人にさえ忘れられるくらい、短命だった。私は誰

がそれをどこから貰つて来たかよく知らない。しかし手の掌に載せれば載せられるような小さい恰好かつこうをして、彼がそこいら中じゅうは這い廻つていた當時を、私はまだ記憶している。この可憐な動物は、ある朝家のものが床を揚げる時、誤つて上から踏み殺してしまつた。ぐうという声がしたので、蒲団の下に潜り込んでいる彼をすぐ引き出して、相当の手当をしたが、もう間に合わなかつた。彼はそれから一日二日してついに死んでしまつた。その後へ来たのがすなわち真黒な今の猫である。

私はこの黒猫を可愛がつても憎がつてもいい。猫の方でも宅中のそのそ歩き廻るだけで、別に私の傍へ寄りつこうという好意を現わした事がない。

ある時彼は台所の戸棚へ這入つて、鍋の中へ落ちた。その鍋の中には胡麻の油がいっぱいあつたので、彼の身体はコスメチックでも塗りつけたように光り始めた。彼はその光る身体で私の原稿紙の上に寝たものだから、油がずっと下まで滲み通つて私をずいぶんな目に逢わせた。

去年私の病気をする少し前に、彼は突然皮膚病に罹つた。顔から額へかけて、毛がだんだん抜けて来る。それをしきりに爪で掻くものだから、瘡蓋がぼろぼろ落ちて、痕が赤裸になる。私はある日食事中この見苦しい様子を眺めて厭な顔をした。



「ああ瘡蓋を零して、もし小供にでも伝染するといけないから、病院へ連れて行って早く療治をしてやるがいい」

私は家のもの<sup>うち</sup>にこういったが、腹の中では、ことによると病気が病気だから全治しないとも思った。昔<sup>むか</sup>し私の知っている西洋人が、ある伯爵から好い犬を貰<sup>もら</sup>って可愛<sup>かわい</sup>がつていたところ、いつかこんな皮膚病に悩まされ出したので、気の毒だからと云って、医者に頼んで殺して貰<sup>もら</sup>った事を、私はよく覚えていたのである。

「クロロフォームか何かで殺してやった方が、かえって苦痛がなくて仕合せだろう」

私は三四度同じ言葉を繰<sup>く</sup>り返<sup>かえ</sup>して見たが、猫がまだ私の思う通りにならないうちに、自分の方が病気でどっと寝てしまった。その間私はついに彼を見る機会をもたなかった。自分の苦痛が直接自分を支配するせいか、彼の病気を考える余裕さえ出なかった。

十月に入<sup>い</sup>って、私はようやく起きた。そうして例のごとく黒い彼を見た。すると不思議な事に、彼の醜い赤裸の皮膚にもそのような黒い毛が生<sup>は</sup>えかかっていた。

「おや癒<sup>なお</sup>るのかしら」

私は退屈な病後の眼を絶えず彼の上に注いでいた。すると私の衰弱がだんだん回復するにつれて、彼の毛もだんだん濃くなって来た。それが平生の通りになると、今度は以

前より肥え始めた。

私は自分の病気の経過と彼の病気の経過とを比較して見て、時々そこに何かの因縁があるような暗示を受ける。そうしてすぐその後から馬鹿らしいと思って微笑する。猫の方ではただにやにや鳴くばかりだから、どんな心持でいるのか私にはまるで解らない。

## 二十九

私は両親の晩年になつてできたいわゆる末っ子である。私を生んだ時、母はこんな年齒をして懷妊するのは面目ないと云つたとかいう話が、今でも折々は繰り返されてゐる。

単にそのためばかりでもあるまいが、私の両親は私が生れ落ちると間もなく、私を里にやつてしまった。その里というのは、無論私の記憶に残っているはずがないけれども、成人の後聞いて見ると、何でも古道具の売買を渡世にしていた貧しい夫婦ものであつたらしい。

私はその道具屋の我樂多といつしよに、小さい笹の中に入れられて、每晚四谷の大通

りの夜店に曝さらされていたのである。それのある晩私の姉が何かのついでにそこを通りかかった時見つけて、可かわい哀そう想そうとでも思っただろう、懐ふへ入れて宅うちへ連れて来たが、私はその夜どうしても寝つかずに、とうとう一晩中泣き続けに泣いたとかいうので、姉は大いに父から叱しかられたそうである。

私はいつ頃ごろその里から取り戻されたか知らない。しかしじきまたある家へ養子にやられた。それはたしか私の四つの歳であつたように思う。私は物心のつく八九歳までそこで成長したが、やがて養家に妙なごたごたが起つたため、再び実家へ戻るような仕儀となつた。

浅草から牛込へ遷うつされた私は、生れた家うちへ歸つたとは気がつかずに、自分の両親をもと通り祖父母とのみ思っていた。そうして相変らず彼らを御爺おじいさん、御婆おばあさんと呼んで毫ごうも怪しまなかつた。向むいでも急に今までの習慣を改めるのが変だと考えたものか、私にそう呼ばれながら澄すえました顔をしていた。

私は普通の末すえツ子このようにけっして両親から可愛かわいがられなかつた。これは私の性質が素直すなおでなかつたためだの、久しく両親に遠ざかつていたためだの、いろいろの原因から来ていた。とくに父からはむしろ苛酷かこくに取扱かわれたという記憶がまだ私の頭に残って

いる。それなのに浅草から牛込へ移された当時の私は、なぜか非常に嬉しかつた。そうしてその嬉しさが誰の目にもつくくらいに著るしく外へ現われた。

馬鹿な私は、本当の両親を爺婆じいばばとのみ思い込んで、どのくらいの月日を空に暮らしたものでろう、それを訊かれるとまるで分らないが、何でも或夜こんな事があつた。

私がひとり座敷に寝ていると、枕元の所で小さな声を出して、しきりに私の名を呼ぶものがある。私は驚ろいて眼を覚ましたが、周囲が真暗なので、誰がそこに蹲踞うずくまっているのか、ちよつと判断がつかなかつた。けれども私は小供だからただじつとして先方の云う事だけを聞いていた。すると聞いているうちに、それが私の家の下女うちの声である事に気がついた。下女は暗い中で私に耳語みみごずりをするようにこういうのである。――

「あなたが御爺さん御婆さんだと思つていらつしやる方は、本当はあなたの御父さんとお母さんなのですよ。先刻さつきね、おおかたそのせいであんなにこつちの宅うちが好なんだろう、妙なものだな、と云つて二人で話していらしたのを私が聞いたから、そつとあなたに教えて上げるんですよ。誰にも話しちゃいけませんよ。よござんすか」

私はその時ただ「誰にも云わないよ」と云つたぎりだったが、心の中では大変嬉しかつた。そうしてその嬉しさは事実を教えてくれたからの嬉しさではなくつて、単に下

女が私に親切だったからの嬉しさであつた。不思議にも私はそれほど嬉しく思つた下女の名も顔もまるで忘れてしまった。覚えてゐるのはただその人の親切だけである。

### 三十

私がこうして書齋に坐つてゐると、来る人の多くが「もう御病氣はすっかり御癒りですか」と尋ねてくれる。私は何度も同じ質問を受けながら、何度も返答に躊躇した。そうしてその極い<sup>きよく</sup>つでも同じ言葉を繰り返すようになった。それは「ええまあどうかこうか生きています」という変な挨拶<sup>あいさつ</sup>に異ならなかつた。

どうかこうか生きてゐる。——私はこの一句を久しい間使用した。しかし使用するごとに、何だか不穩<sup>ふおん</sup>当な心持がするので、自分でも実はやめられるならばと思つて考へてみたが、私の健康状態を云い現わすべき適当な言葉は、他<sup>た</sup>にどうしても見つからなかつた。

ある日T君が来たから、この話をして、癒<sup>なお</sup>つたとも云えず、癒らないとも云えず、何と答えて好いか分らないと語つたら、T君はすぐ私にこんな返事をした。

「そりや癒ったとは云われませんね。そう時々再発するようじゃ。まあもとの病気の継続なんでしょう」

この継続という言葉聞いた時、私は好い事を教えられたような気がした。それから以後は、「どうかこうか生きています」という挨拶あいさつをやめて、「病気はまだ継続中です」と改ためた。そうしてその継続の意味を説明する場合には、必ず歐洲の大乱を引合ひきあひに出した。

「私はちようど独乙ドイツが聯合軍と戦争をしているように、病気と戦争をしているのです。今こうやってあなたと対坐していられるのは、天下が太平になったからではないので、塹壕ざんごうの中に這入はいって、病気と睨めにらつくらをしているからです。私の身体からだは乱世です。いっづどんな変へんが起らないとも限りません」

或人は私の説明を聞いて、面白そうにははと笑った。或人は黙っていた。また或人は気の毒らしい顔をした。

客の帰ったあとで私はまた考えた。——継続中のものはおそらく私の病気ばかりではないだろう。私の説明を聞いて、笑談じょうたんだと思つて笑う人、解らないで黙っている人、同情の念に駆かられて気の毒らしい顔をする人、——すべてこれらの人の心の奥には、私の

知らない、また自分達さえ気のつかない、継続中のものがいくらでも潜<sup>ひそ</sup>んでいるのではなからうか。もし彼らの胸に響くような大きな音で、それが一度に破裂したら、彼らははたしてどう思うだろう。彼らの記憶はその時もはや彼らに向って何物をも語らないだろう。過去の自覚はとくに消えてしまっているだろう。今と昔とまたその昔の間に何らの因果を認める事のできない彼らは、そういう結果に陥<sup>おちい</sup>った時、何と自分を解釈して見る気だろう。所詮<sup>しよせん</sup>我々は自分で夢の間に製造した爆裂弾を、思い思いに抱<sup>いだ</sup>きながら、一人残らず、死という遠い所へ、談笑しつつ歩いて行くのではなからうか。ただどんなものを抱<sup>だ</sup>いているのか、他も知らず自分も知らないのです、仕合せなんでしょう。

私は私の病気が継続であるという事に気がついた時、歐洲の戦争もおそらくいつの世からかの継続だろうと考えた。けれども、それがどこからどう始まって、どう曲折して行くかの問題になると全く無知識なので、継続という言葉を解しない一般の人を、私はかえって羨<sup>うらや</sup>ましく思っている。

私がまだ小学校に行っていた時分に、喜きいちゃんという仲の好い友達があつた。喜いちゃんは当時中町なかちょうの叔父おじさんの宅うちにいたので、そう道程みちのりの近くない私の所からは、毎日会あいに行く事が出来悪にくかつた。私はおもに自分の方から出かけないで、喜いちゃんの来るのを宅で待つていた。喜いちゃんはいくら私が行かないでも、きつと向うから来るにきまつていた。そうしてその来る所は、私の家の長屋を借りて、紙や筆を売る松さんの許もとであつた。

喜いちゃんには父母ちちははがないようだったが、小供の私には、それがいつこう不思議とも思われなかつた。おそらく訊きいて見た事もなかつたろう。したがつて喜いちゃんがなぜ松さんの所へ来るのか、その訳さえも知らずにいた。これはずっと後で聞いた話であるが、この喜いちゃんの御父おとつさんというのは、昔むかし銀座の役人か何かをしていた時、贖金にせがねを造つたとかいう嫌疑けんぎを受けて、入牢じゅうろうしたまま死んでしまったのだという。それであるに取り残された細君が、喜いちゃんを先夫せんぶの家へ置いたなり、松さんの所へ再縁うみしたのだから、喜いちゃんが時々生の母に会いに来るのは当り前の話であつた。

何にも知らない私は、この事情を聞いた時ですら、別段変な感じも起さなかつたくらいだから、喜いちゃんとふざけまわつて遊ぶ頃に、彼の境遇などを考えた事はただの一



度もなかった。

喜いちちゃんも私も漢学が好きだったので、解りもしない癖に、よく文章の議論などをして面白がった。彼はどこから聴いてくるのか、調べてくるのか、よくむずかしい漢籍の名前などを挙げて、私を驚ろかす事が多かった。

彼はある日私の部屋同様になっている玄関に上り込んで、懷から二冊つづきの書物を出して見せた。それは確に写本であった。しかも漢文で綴つてあつたように思う。私は喜いちちゃんから、その書物を受け取つて、無意味にそこを引つ繰返して見ていた。実は何が何だか私にはさっぱり解らなかつたのである。しかし喜いちちゃんは、それを知つてゐるかなどと露骨な事をいう性質ではなかつた。

「これは太田南畝おおたなんぼの自筆なんだがね。僕の友達がそれを売りたいというので君に見せに来たんだが、買つてやらないか」

私は太田南畝という人を知らなかつた。

「太田南畝つていったい何だい」

「蜀山人しよくさんじんの事さ。有名な蜀山人さ」

無学な私は蜀山人という名前さえまだ知らなかつた。しかし喜いちちゃんにそう云われ

て見ると、何だか貴重の書物らしい気がした。

「いくらなら売るのがいい」と訊いて見た。

「五十銭に売りたいと云うんだがね。どうだろう」

私は考えた。そうして何しろ価値切つて見るのが上策だと思いついた。

「二十五銭なら買つてもいい」

「それじゃ二十五銭でも構わないから、買つてやりたまえ」

喜いちちゃん是这样云いつつ私から二十五銭受取つておいて、またしきりにその本の効能を述べ立てた。私には無論その書物が解らないのだから、それほど嬉しくもなかったけれども、何しろ損はしないだろうというだけの満足はあった。私はその夜南畝莠言——たしかそんな名前だと記憶しているが、それを机の上に載せて寝た。

## 三十二

翌日になると、喜いちちゃんがまたぶらりとやって来た。

「君昨日買つて貰った本の事だね」

喜いちちゃんはそれだけ云つて、私の顔を見ながらぐずぐずしている。私は机の上に載せてあつた書物に眼を注いだ。

「あの本かい。あの本がどうかしたのかい」

「実はあすこの宅の阿爺おやじに知れたものだから、阿爺が大変怒つてね。どうか返して貰つて来てくれつて僕に頼むんだよ。僕も一遍君に渡したもんだから厭いやだったけれども仕方がないからまた来たのさ」

「本を取りにかい」

「取りにつて訳でもないけれども、もし君の方で差支さしつかえがないなら、返してやつてくれないか。何しろ二十五銭じゃ安過ぎるつていうんだから」

この最後の一言いちごんで、私は今まで安く買い得たという満足の裏に、ぼんやり潜ひそんでいた不快、——不善の行為から起る不快——を判然はつきり自覚し始めた。そうして一方では狡猾ずる私を怒ると共に、一方では二十五銭で売った先方を怒った。どうしてこの二つの怒りを同時に和やわらげたものだろう。私は苦にがい顔をしてしばらく黙っていた。

私のこの心理状態は、今の私が小供の時の自分を回顧して解剖するのだから、比較的明瞭めいりょうに描き出されるようなものの、その場合の私にはほとんど解らなかつた。私さえた

だ苦い顔をしたという結果だけしか自覚し得なかったのだから、相手の喜いちちゃんには無論それ以上解わかるはずがなかった。括弧かっこの中でいうべき事かも知れないが、年齢としを取った今日こんにちでも、私にはよくこんな現象が起つてくる。それでよく他ひとから誤解される。

喜いちちゃんは私の顔を見て、「二十五銭では本当に安過ぎるんだとさ」と云った。

私はいきなり机の上に載せておいた書物を取って、喜いちちゃんの前に突き出した。

「じゃ返そう」

「どうも失敬した。何しろ安公やすこうの持つてるものでないんだから仕方がない。阿爺おやじの宅うちに昔からあったやつを、そつと売うつて小遣こづかいにしようつて云うんだからね」

私はふりふりして何とも答えなかった。喜いちちゃんは袂ふしから二十五銭出して私の前へ置きかけたが、私はそれに手を触れようとしなかった。

「その金なら取らないよ」

「なぜ」

「なぜでも取らない」

「そうか。しかしつまらないじゃないか、ただ本だけ返すのは。本を返すくらいなら二十五銭も取りたまいな」

私はたまらなくなつた。

「本は僕のものだよ。いったん買った以上は僕のものにきまつてるじゃないか」

「そりゃそうに違いない。違いないが向の宅むこううちでも困つてゐるんだから」

「だから返すと云つてゐるじゃないか。だけど僕は金を取る訳がないんだ」

「そんな解らない事を云わずに、まあ取つておきたまいな」

「僕はやるんだよ。僕の本だけでも、欲しければやろうというんだよ。やるんだから本だけ持つてつたら好いじゃないか」

「そうかそんなら、そうしよう」

喜いちゃんは、とうとう本だけ持つて歸つた。そうして私は何の意味なしに二十五銭の小遣を取られてしまったのである。

### 三十三

世の中に住む人間の一人いちにんとして、私は全く孤立して生存する訳に行かない。自然他と交渉の必要がどこからか起つてくる。時候の挨拶あいさつ、用談、それからもつと込み入こみいった懸かひ

合——これらから脱却する事は、いかに枯淡な生活を送っている私にもむずかしいのである。

私は何でも他のいう事を真に受けて、すべて正面から彼らの言語動作を解釈すべきものだろうか。もし私が持つて生れたこの単純な性情に自己を託して顧みないとなると、時々飛んでもない人から騙される事があるだろう。その結果蔭で馬鹿にされたり、冷評かされたりする。極端な場合には、自分の面前でさえ忍ぶべからざる侮辱を受けないと限らない。

それでは他はみな擦れ枯らしの嘘吐ばかりと思つて、始めから相手の言葉に耳も借さず、心も傾けず、或時はその裏面に潜んでいるらしい反対の意味だけを胸に収めて、それで賢い人だと自分を批評し、またそこに安住の地を見出し得るだろうか。そうすると私は人を誤解しないとも限らない。その上恐るべき過失を犯す覚悟を、初手から仮定して、かからなければならぬ。或時は必然の結果として、罪のない他を侮辱するくらいの厚顔を準備しておかなければ、事が困難になる。

もし私の態度をこの両面のどっちかに片づけようとすると、私の心にまた一種の苦悶が起る。私は悪い人を信じたくない。それからまた善い人を少しでも傷けたくない。そ

うして私の前に現われて来る人は、ことごとく悪人でもなければ、またみんな善人とも思えない。すると私の態度も相手しだいでいろいろに変わって行かなければならないのである。

この変化は誰にでも必要で、また誰でも実行している事だろうと思うが、それがはたして相手にぴたりと合って寸分間違のない微妙な特殊な線の上をあぶなげもなく歩いていけるだろうか。私の大いなる疑問は常にそこに蟠<sup>わたか</sup>まっている。

私の僻<sup>ひがみ</sup>を別にして、私は過去において、多くの人から馬鹿にされたという苦<sup>にが</sup>い記憶をもっている。同時に、先方の云う事や為<sup>す</sup>る事を、わざと平たく取らずに、暗<sup>あん</sup>にその人の品性に恥を搔<sup>か</sup>かしたと同じような解釈をした経験もたくさんありはしまいかと思う。

他<sup>ひと</sup>に対する私の態度はまず今までの私の経験から来る。それから前後の関係と四囲の状況から出る。最後に、曖昧<sup>あいまい</sup>な言葉ではあるが、私が天から授かった直覚が何分か働らく。そうして、相手に馬鹿にされたり、また相手を馬鹿にしたり、稀<sup>まれ</sup>には相手に彼相当地な待遇を与えたりしている。

しかし今までの経験というものは、広いようで、その実<sup>じつ</sup>はなはだ狭い。ある社会の一部分で、何度となく繰り返された経験を、他の一部分へ持って行くと、まるで通用しな

い事が多い。前後の關係とか四囲の狀況とか云ったところで、千差万別なのだから、その応用の区域が限られているばかりか、その実千差万別に思慮を廻らさなければ役に立たなくなる。しかもそれを廻らす時間も、材料も充分給与されていない場合が多い。

それで私はともすると事実あるのだから、またないのだから解らない、極めてあやふやな自分の直覺というものを主位に置いて、他を判断したくなる。そうして私の直覺がはたして当たったか当たらないか、要するに客觀的事実によつて、それを確める機会をもたない事が多い。そこにまた私の疑いが始終靄しじゅうもやのようにかかつて、私の心を苦しめている。

もし世の中に全知全能ぜんちぜんのうの神があるならば、私はその神の前に跪ひざまずいて、私に毫髪ごうはつの疑を挟さしはむ余地もないほど明らかな直覺を与えて、私をこの苦悶くもんから解脱げだつせしめん事を祈る。でなければ、この不明な私の前に出て来るすべての人を、玲瓏透徹れいろうとうてつな正直ものに変化して、私とその人との魂がぴたりと合うような幸福を授けたまわん事を祈る。今の私は馬鹿で人に騙だまされるか、あるいは疑い深くて人を容いれる事ができないか、この両方だけしかないような気がする。不安で、不透明で、不愉快に充みちている。もしそれが生涯しょうがいつづくとするならば、人間とはどんなに不幸なものだろう。



私が大学にいる頃教えたある文学士が来て、「先生はこの間高等工業で講演をなすつたそうですね」というから、「ああやった」と答えると、その男が「何でも解らなかつたようですよ」と教えてくれた。

それまで自分の云つた事について、その方面の掛念けねんをまるでもつていなかった私は、彼の言葉を聞くとひとしく、意外の感に打たれた。

「君はどうしてそんな事を知ってるの」

この疑問に対する彼の説明は簡単であつた。親戚だか知人だか知らないが、何しろ彼に関係のある或家うちの青年が、その学校に通つていて、当日私の講演を聴いた結果を、何だか解らないという言葉で彼に告げたのである。

「いったいどんな事を講演なすつたのですか」

私は席上で、彼のためにまたその講演の梗概こうがいを繰くり返かえした。

「別にむずかしいとも思えない事だろう君。どうしてそれが解らないかしら」

「解らないでしょう。どうせ解りやしません」

私には断乎だんてたるこの返事がいかにも不思議に聞こえた。しかしそれよりもなお強く私の胸を打ったのは、止よせばよかったという後悔の念であった。自白すると、私はこの学校から何度となく講演を依頼されて、何度となく断つたのである。だからそれを最後に引き受けた時の私の腹には、どうかしてそこに集まる聴衆に、相当の利益を与えたいという希望があった。その希望が、「どうせ解りやしません」という簡単な彼の一言いちごんで、みごとに粉碎ふんさいされてしまつて見ると、私はわざわざ浅草まで行く必要がなかつたのだと、自分を考えない訳に行かなかつた。

これはもう一二年前の古い話であるが去年の秋またある学校で、どうしても講演をやらなければ義理が悪い事になつて、ついにそこへ行つた時、私はふと私を後悔させた前年を思い出した。それに私の論じたその時の題目が、若い聴衆の誤解を招きやすい内容を含んでいたので、私は演壇を下りる間際まぎわにこう云つた。――

「多分誤解はないつもりですが、もし私の今御話したうちに、判然はつきりしないところがあるなら、どうぞ私宅まで来て下さい。できるだけあなたがたに御納得ごなつとくの行くように説明して上げるつもりですから」

私のこの言葉が、どんな風に反響をもたらずだらうかという予期は、当時の私にはほ

とんど無かつたように思う。しかしそれから四五日経<sup>た</sup>つて、三人の青年が私の書齋に這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>つて来たのは事実である。そのうちの二人は電話で私の都合を聞き合せた。一人は鄭<sup>てい</sup>寧<sup>ねい</sup>な手紙を書いて、面会の時間を拵<sup>てしら</sup>えてくれと注文して来た。

私は快<sup>よろこ</sup>よくそれらの青年に接した。そうして彼らの来意を確<sup>たし</sup>かめた。一人の方は私の予想通り、私の講演についての筋道の質問であつたが、残る二人の方は、案外にも彼らの友人がその家庭に対して採<sup>と</sup>るべき方針についての疑義を私に訊<sup>き</sup>こうとした。したがってこれは私の講演を、どう実社会に応用して好いかという彼らの目前に逼<sup>せま</sup>つた問題を持つて来たのである。

私はこれら三人のために、私の云うべき事を云い、説明すべき事を説明したつもりである。それが彼らにどれほどの利益を与えたか、結果からいうとこの私にも分らない。しかしそれだけにしたところで私には満足なのである。「あなたの講演は解らなかつたそうです」と云われた時よりも遙<sup>はるか</sup>に満足なのである。

「この稿が新聞に出た二三日あとで、私は高等工業の学生から四五通の手紙を受取<sup>う</sup>つた。その人々はみんな私の講演を聴いたものばかりで、いずれも私がここで述べた失望を打ち消すような事実を、反証として書いて来てくれたのである。だから

その手紙はみな好意に充ちていた。なぜ一学生の云った事を、聴衆全体の意見として速断するかなどという詰問的のものは一つもなかった。それで私はここに一言を附加して、私の不明を謝し、併せて私の誤解を正してくれた人々の親切をありがたく思う旨を公けにするのである。」

### 三十五

私は小供の時分よく日本橋の瀬戸物町にある伊勢本という寄席へ講釈を聴きに行つた。今の三越の向側にいつでも昼席の看板がかかつていて、その角を曲ると、寄席はい小半町行くか行かない右手にあつたのである。

この席は夜になると、色物だけしかかけないので、私は昼よりほかに足を踏み込んだ事がなかったけれども、席数からいうと一番多く通つた所のように思われる。当時私のいた家は無論高田の馬場の下ではなかった。しかしいくら地理の便が良かったからと云つて、どうしてあんなに講釈を聴きに行く時間が私にあつたものか、今考えるとむしろ不思議なくらいである。

これも今からふり返って遠い過去を眺めるせいでもあるが、そこは寄席としてはむしろ上品な気分を客に起させるようにできていた。高座こうざの右側みぎわきには帳場格子ちやうばこうしのような仕切りを二方に立て廻して、その中に定連じようれんの席が設けてあつた。それから高座こうざの後うしろが縁側えんがわで、その先がまた庭になっていた。庭には梅の古木ななが斜ななめに井桁いげたの上に突き出たりして、窮屈な感じのしないほどの大空が、縁から仰がれるくらいに余分の地面を取り込んでいた。その庭を東に受けて離れ座敷のような建物も見えた。

帳場格子のうちにいる連中は、時間が余って使い切れない有福な人達なのだから、みんな相応な服装なりをして、時々吞氣のんきそうに袂たもとから毛拔けぬきなどを出して根氣よく鼻毛を抜いていた。そんな長閑のどかな日には、庭の梅の樹きに鶯うぐいすが来て啼なくような氣持もした。

中人なかいりになると、菓子装箱入のまま茶を売る男が客の間へ配って歩くのがこの席の習慣になっていた。箱は浅い長方形のもので、まず誰でも欲しいと思う人の手の届く所に一つと云った風に都合よく置かれるのである。菓子なの数は一箱に十ぐらいの割だったかと思うが、それを食たべたいだけ食たべて、後からその代価を箱の中に入れるのが無言の規約になっていた。私はその頃この習慣を珍らしいもののように興がって眺めていたが、今となって見ると、こうした鷹揚おうようで吞氣のんきな気分は、どこの人寄場ひとよせばへ行っても、もう味わう

事ができまいと思うと、それがまた何となく懐かしい。

私はそんなおつとりと物寂びた空気の中で、古めかしい講釈というものをいろいろの人から聴いたのである。その中には、す・と・と・こ、の・ん・の・ん、ず・い・ず・い、などという妙な言葉を使う男もいた。これは田辺南竜と云って、もとはどこかの下足番であつたとかいう話である。そのす・と・と・こ、の・ん・の・ん、ず・い・ず・いはなはだ有名なものであつたが、その意味を理解するものは一人もなかった。彼はただそれを軍勢の押し寄せる形容詞として用いていたらしいのである。

この南竜はとつくの昔に死んでしまった。そのほかのものもたいていは死んでしまった。その後の様子をまるで知らない私には、その時分私を喜ばせてくれた人のうちで生きているものがはたして何人あるのだから全く分らなかった。

ところがいつか美音会の忘年会のあつた時、その番組を見たら、吉原の幫間の茶番だの何だのが列べて書いてあるうちに、私はたつた一人の当時の旧友を見出した。私は新富座へ行つて、その人を見た。またその声を聞いた。そうして彼の顔も咽喉も昔とちつとも變つていないのに驚ろいた。彼の講釈も全く昔の通りであつた。進歩もしない代りに、退歩もしていなかった。廿世紀のこの急劇な変化を、自分と自分の周囲に恐ろしく

意識しつづつあった私は、彼の前に坐りながら、絶えず彼と私とを、心のうちで比較して一種の黙想に耽<sup>ふけ</sup>っていた。

彼というのは馬琴<sup>ばきん</sup>の事で、昔伊勢本<sup>いせもと</sup>で南竜の中入前をつとめていた頃には、琴凌<sup>きんりょう</sup>と呼ばれた若手だったのである。

### 三十六

私の長兄はまだ大学とまらない前の開成校<sup>かいせいこう</sup>にいたのだが、肺<sup>わづら</sup>を患<sup>わづら</sup>つて中途で退学してしまった。私とはだいぶ年齒<sup>とし</sup>が違<sup>ちが</sup>うので、兄弟としての親しみよりも、大人<sup>おとな</sup>対小供としての関係の方が、深く私の頭に浸<sup>し</sup>み込<sup>こ</sup>んでいる。ことに怒<sup>おこ</sup>られた時はそうした感じが強く私を刺戟<sup>しげき</sup>したように思う。

兄は色の白い鼻筋の通った美しくい男であつた。しかし顔だちから云つても、表情から見ても、どこかに峻<sup>げん</sup>しい相<sup>そう</sup>を具えていて、むやみに近寄れないと云つた風の逼<sup>せま</sup>つた心持を他<sup>ひと</sup>に与えた。

兄の在学中には、まだ地方から出て来た貢進生<sup>こうしんせい</sup>などのいる頃だったので、今の青年に

は想像のできないような氣風が校内のそこに残っていたらしい。兄は或上級生に艶ふ書みをつけられたと云つて、私に話した事がある。その上級生というのは、兄などよりもずっと年齒としうえ上の男であつたらしい。こんな習慣の行なわれない東京で育つた彼は、はたしてその文ふみをどう始末したものだろう。兄はそれ以後学校の風呂でその男と顔を見合せるたびに、きまりの悪い思をして困つたと云つていた。

学校を出た頃の彼は、非常に四角四面で、始終堅苦しく構えていたから、父や母も多少彼に氣をおく様子が見えた。その上病氣のせいでもあろうが、常に陰氣臭いんきくさい顔をして、宅うちにばかり引込ひっこんでいた。

それがいつとなく融とけて来て、人柄ひとがらが自おのずと柔らかになつたと思うと、彼はよく古渡こわた唐棧とうざんの着物に角帶かくおびなどを締しめて、夕方から宅を外にし始めた。時々は紫色むしやくいじで亀甲型きっこうがたを一面に摺すつた亀清かめせいの団扇うちわなどが茶の間に放り出だされるようになった。それだけならまだ好いが、彼は長火鉢ながひばちの前へ坐すわつたまま、しきりに仮色かわいろを遣い出した。しかし宅のものは別段それに頓着とんじやくする様子も見えなかつた。私は無論平氣であつた。仮色かわいろと同時に藤八拳とうはちけんも始まつた。しかしこの方は相手あひが要いるので、そう毎晩は繰り返されなかつたが、何しろ変に無器用な手を上げたり下げたりして、熱心にやっていた。相手はおもに三番目の兄



が勤めていたようである。私は真面目な顔をして、ただ傍観しているに過ぎなかった。

この兄はとうとう肺病で死んでしまった。死んだのはたしか明治二十年だと覚えている。すると葬式も済み、待夜も済んで、まず一片付というところへ一人の女が尋ねて来た。三番目の兄が出て応接して見ると、その女は彼にこんな事を訊いた。

「兄さんは死ぬまで、奥さんを御持ちになりやしますまいね」

兄は病氣のため、生涯妻帯しなかった。

「いいえしまいまで独身で暮らしていました」

「それを聞いてやっと安心しました。妾のようなものは、どうせ旦那がなくなつちや生きて行かないから、仕方ありませんけれども、……」

兄の遺骨の埋められた寺の名を教わって帰って行つたこの女は、わざわざ甲州から出て来たのであるが、元柳橋の芸者をしている頃、兄と関係があつたのだという話を、私はその時始めて聞いた。

私は時々この女に会つて兄の事などを物語つて見たい気がしないでもない。しかし会つたら定めし御婆さんになって、昔とはまるで違つた顔をしてはいはしまいかと考える。そうしてその心もその顔同様に皺が寄つて、からからに乾いてはいはしまいかとも考

える。もしそうだとすると、彼女が今になって兄の弟の私に会うのは、彼女にとってかえって辛い悲しい事かも知れない。

### 三十七

私は母の記念のためにここで何か書いておきたいと思うが、あいにく私の知っている母は、私の頭に大した材料を遺して行ってくれなかった。

母の名は千枝ちえといった。私は今でもこの千枝という言葉を懐かしいものの一つに数えている。だから私にはそれがただ私の母だけの名前で、けっしてほかの女の名前であってはならないような気がする。幸いに私はまだ母以外の千枝という女に出会った事がない。

母は私の十三四の時に死んだのだけでも、私の今遠くから呼び起す彼女の幻像は、記憶の糸をいくら辿たどって行っても、御婆さんに見える。晩年に生れた私には、母の水々しい姿を覚えている特権がついに与えられずにしまったのである。

私の知っている母は、常に大きな眼鏡めがねをかけて裁縫しじとをしていた。その眼鏡は鉄縁の古

風なもので、球の大きさが直径二寸以上もあつたように思われる。母はそれをかけたまま、すこし顎を襟元へ引きつけながら、私をじつと見る事がしばしばあつたが、老眼の性質を知らないその頃の私には、それがただ彼女の癖とのみ考えられた。私はこの眼鏡と共に、いつでも母の背景になつていた一間の襖を想い出す。古びた張交の中に、生死事大無常迅速云々と書いた石摺なども鮮やかに眼に浮んで来る。

夏になると母は始終紺無地の縞の帷子を着て、幅の狭い黒縹子の帯を締めていた。不思議な事に、私の記憶に残っている母の姿は、いつでもこの真夏の服装で頭の中に現われるだけなので、それから紺無地の縞の着物と幅の狭い黒縹子の帯を取り除くと、後に残るものはただ彼女の顔ばかりになる。母がかつて縁鼻へ出て、兄と碁を打っていた様子などは、彼ら二人を組み合わせた図柄として、私の胸に収めてある唯一の記念なのだ。が、そこでも彼女はやはり同じ帷子を着て、同じ帯を締めて坐っているのである。

私はついぞ母の里へ伴れて行かれた覚えがないので、長い間母がどこから嫁に来たのか知らずに暮らしていた。自分から求めて訊きたがるような好奇心はさらになかった。それでその点もやはりぼんやり霞んで見えるよりほかに仕方がないのだが、母が四ツ谷大番町で生れたという話だけは確かに聞いていた。宅は質屋であつたらしい。蔵が幾戸前

とかあったのだと、かつて人から教えられたようにも思うが、何しろその大番町という所を、この年になるまで今だに通った事のない私のことだから、そんな細かな点はまるで忘れてしまった。たといそれが事実であつたにせよ、私の今もっている母の記念のなかに蔵屋敷などはけつして現われて来ないのである。おおかたその頃にはもう潰れてしまったのだらう。

母が父の所へ嫁にくるまで御殿奉公をしていたという話もおぼろげに覚えていたが、この大名の屋敷へ上つて、どのくらい長く勤めていたものか、御殿奉公の性質さえよく弁えない今の私には、ただ淡い薫を残して消えた香のようなもので、ほとんどとりとめようのない事実である。

しかしそう云えば、私は錦絵に描いた御殿女中の羽織っているような華美な総模様の着物を宅の蔵の中で見た事がある。紅絹裏を付けたその着物の表には、桜だか梅だかが一面に染め出されて、ところどころに金糸や銀糸の刺繍も交っていた。これは恐らく当時の裯褙とかいうものなのだろう。しかし母がそれを打ち掛けた姿は、今想像してもまるで眼に浮かばない。私の知っている母は、常に大きな老眼鏡をかけた御婆さんであつたから。

それのみか私はこの美しい襦襦がその後小搔卷に仕立直されて、その頃宅にできた病人の上に載せられたのを見たくらいだから。

### 三十八

私が大学で教おわったある西洋人が日本を去る時、私は何か餞別せんべつを贈ろうと思つて、宅の蔵くらから高時たかとき絵の緋ひの房ふさの付いた美しい文箱ふばこを取り出して来た事も、もう古い昔である。それを父の前へ持つて行つて貰い受けた時の私は、全く何の気もつかなかつたが、今こうして筆を執とつて見ると、その文箱も小搔卷に仕立直された紅絹裏の襦襦同様に、若い時分の母の面影おもかげを濃こゝろかに宿しやうしているように思われてならない。母は生涯しょうがいの父から着物しやくぶつを拵こしらへて貰った事がないという話だが、はたして拵こしらへて貰わないでもすむくらいな支度したくをして来たものだろうか。私の心に映るあの紺無地の絹こんむじの帷子かたびらも、幅の狭い黒繻子くろじゆすの帯も、やはり嫁に來た時からすでに簞笥たんすの中にあつたものなのだろうか。私は再び母に會きつて、万事をことごとく口ずから訊きいて見たい。

悪戯いたづらで強情な私は、けつして世間の末すえツ子このように母から甘く取扱かわれなかつた。

それでも宅中<sup>うちじゅう</sup>で一番私を可愛<sup>かわい</sup>がってくれたものは母だという強い親しみの心が、母に対する私の記憶<sup>うち</sup>の中には、いつでも寵<sup>こも</sup>っている。愛憎を別にして考えて見ても、母はたしかに品位のある床<sup>ゆか</sup>しい婦人に違なかつた。そうして父よりも賢<sup>かし</sup>こそうに誰の目にも見えた。氣むずかしい兄も母だけには畏敬<sup>いけい</sup>の念を抱<sup>いだ</sup>いていた。

「御母<sup>おつか</sup>さんは何にも云わないけれども、どこかに怖いところがある」

私は母を評した兄のこの言葉を、暗い遠くの方から明らかに引張<sup>ひっぱ</sup>りだしてくる事が今でもできる。しかしそれは水に融<sup>と</sup>けて流れかかつた字体を、きつとなつてやつと元の形に返したような際<sup>きわ</sup>どい私の記憶の断片に過ぎない。そのほかの事になると、私の母はすべて私にとって夢である。途切<sup>とぎ</sup>れ途切<sup>とぎ</sup>れに残っている彼女の面影<sup>おもかげ</sup>をいくら丹念に拾い集めても、母の全体はとても髣髴<sup>ほうふつ</sup>する訳に行かない。その途切<sup>とぎ</sup>れ途切<sup>とぎ</sup>れに残っている昔さえ、半ば以上はもう薄れ過ぎて、しつかりとは掴<sup>つか</sup>めない。

或時私は二階<sup>あが</sup>へ上つて、たった一人で、昼寝をした事がある。その頃の私は昼寝をする、よく変なものに襲われがちであつた。私の親指が見る間に大きくなつて、いつまで経<sup>た</sup>つても留<sup>とど</sup>まらなかつたり、あるいは仰向<sup>あおむき</sup>に眺<sup>のぞ</sup>めている天井<sup>てんじょう</sup>がだんだん上から下りて来て、私の胸を抑<sup>おさ</sup>えついたり、または眼を開<sup>あ</sup>いて普段と変らない周囲を現に見ているの

に、身体<sup>からだ</sup>だけが睡魔<sup>とろこ</sup>の擒<sup>とら</sup>となつて、いくらもがいても、手足を動かす事ができなかったり、後で考えてさえ、夢だか正気だか訳の分らない場合が多かつた。そうしてその時も私はこの変なものに襲<sup>おそ</sup>われたのである。

私はいつどこで犯した罪か知らないが、何しろ自分の所有でない金銭を多額に消費してしまつた。それを何の目的で何に遣<sup>つか</sup>つたのか、その辺も明瞭<sup>めいりょう</sup>でないけれども、小供の私にはとても償<sup>つぐな</sup>う訳に行かないので、氣の狭い私は寝ながら大變苦しみ出した。そうしてしまいに大きな声を揚<sup>あ</sup>げて下にいる母を呼んだのである。

二階<sup>はしごだん</sup>の梯子<sup>はしご</sup>段は、母の大眼鏡と離<sup>はな</sup>す事のできない、生死<sup>しやうじ</sup>事大無常<sup>むじやう</sup>迅速<sup>じんそく</sup>云々と書いた石摺<sup>いし</sup>の張交<sup>はりまぜ</sup>にしてある襖<sup>ふすま</sup>の、すぐ後<sup>うしろ</sup>についているので、母は私の声を聞きつけると、すぐ二階へ上つて来てくれた。私はそこに立つて私を眺<sup>のぞ</sup>めている母に、私の苦しみを話して、どうかして下さいと頼<sup>たの</sup>んだ。母はその時微笑しながら、「心配しないで好いよ。御母<sup>おつか</sup>さんがいくらでも御金を出して上げるから」と云つてくれた。私は大變嬉<sup>うれ</sup>しかつた。それで安心してまたやすやすや寝てしまつた。

私はこの出来事が、全部夢なのか、または半分だけ本当なのか、今でも疑っている。しかしどうしても私は實際大きな声を出して母に救を求め、母はまた實際の姿を現わし

て私に慰藉いしやの言葉を与えてくれたとしか考えられない。そうしてその時の母の服装なは、いつも私の眼に映る通り、やはり紺無地こんむじの紹ろの帷子かたびらに幅の狭い黒縹くろじゆす子の帯だったのである。

### 三十九

今日は日曜なので、小供が学校へ行かないから、下女も気を許したものと見えて、いつもより遅く起きたようである。それでも私の床を離れたのは七時十五分過であつた。顔を洗つてから、例の通り焼麵トーストと牛乳と半熟の鶏卵たまごを食べて、厠かわやに上ろうとすると、あいにく肥取こいとりが来ているので、私はしばらく出た事のない裏庭の方へ歩を移した。すると植木屋が物置の中で何か片づけものをしていた。不要の炭俵を重ねた下から威勢の好い火が燃えあがる周囲に、女の子が三人ばかり心持よさそうに煖を取っている様子が私の注意を惹ひいた。

「そんなに焚火たきびに当たると顔が真黒になるよ」と云つたら、末の子が、「いやあーだ」と答えた。私は石垣の上から遠くに見える屋根瓦やねがわらの融とけつくした霜しもに濡ぬれて、朝日にきら



つく色を眺めたあと、また家の中へ引き返した。

親類の子が来て掃除そうじをしている書斎の整頓するのを待つて、私は机を縁側えんがわに持ち出した。そこで日当りの好い欄干らんかんに身を靠もたせたり、頬杖ほおづえを突いて考えたり、またしばらくはじつと動かずにただ魂を自由に遊ばせておいてみた。した。

軽い風が時々鉢植はちうえの九花蘭きゅうからんの長い葉を動かしにきた。庭木の中で鶯うぐいすが折々下手な囀さえずりを聴かせた。毎日硝子戸ガラスどの中に坐すわっていた私は、まだ冬だ冬だと思っているうちに、春はいつしか私の心を蕩揺とうようし始めたのである。

私の冥想めいそうはいつまで坐すわっていても結晶しなかった。筆をとって書こうとすれば、書く種は無尽蔵にあるような心持もするし、あれにしようか、これにしようかと迷い出すと、もう何を書いてもつまらないのだという呑気のんきな考も起つてきた。しばらくそこで佇たたずんでいるうちに、今度は今まで書いた事が全く無意味のように思われ出した。なぜあんなものを書いたのだろうという矛盾が私を嘲弄ちやうろうし始めた。ありがたい事に私の神経は静まっていた。この嘲弄の上に乘つてふわふわと高い冥想めいそうの領分のぼに上つて行くのが自分には大変な愉快になった。自分の馬鹿な性質を、雲の上から見下みおろして笑いたくなつた私は、自分で自分を輕蔑けいべつする氣分に揺られながら、揺籃ようらんの中で眠ねむる小供に過ぎなかつた。

私は今まで他の事と私の事をごちやごちやに書いた。他の事を書くときには、なるべく相手の迷惑にならないようにとの掛念けねんがあつた。私の身の上を語る時分には、かえつて比較的自由な空気の中に呼吸する事ができた。それでも私はまだ私に對して全く色氣を取り除き得る程度に達していなかった。嘘うそを吐ついて世間を欺あざむくほどの銜氣げんきがないにしても、もつと卑いやしい所、もつと悪い所、もつと面目を失するような自分の欠点を、つい發表しずじまつた。聖オーガスチンの懺悔ざんげ、ルソーの懺悔、オピアムイーターの懺悔、——それをいくら辿たどつて行つても、本当の事實は人間の力で叙述できるはずがないと誰かが云つた事がある。まして私の書いたものは懺悔ではない。私の罪は、——もしそれを罪と云い得るならば、——すこぶる明るところからばかり写されていただらう。そこに或人は一種の不快を感じずるかも知れない。しかし私自身は今その不快の上に跨またがつて、一般の人類をひろく見渡しながらか微笑しているのである。今までつまらない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡して、あたかもそれが他人であつたかの感を抱いだきつつ、やはり微笑しているのである。

まだ鶯うぐいすが庭で時々鳴く。春風が折々思ひ出したように九花蘭きゅうからんの葉を揺うごかしに来る。猫がどこかで痛いたく噛かまれた米噛こめかみを日に曝さらして、あたたかそうに眠さっている。先刻さつきまで庭で

護謨風船ゴムふうせんを揚げあて騒いでいた小供達は、みんな連れ立って活動写真へ行ってしまった。  
家も心もひっそりとしたうちに、私は硝子戸ガラスドを開け放って、静かな春の光に包まれなが  
ら、恍惚うつとりとこの稿を書き終るのである。そうした後で、私はちよつと肱ひじを曲げて、この  
縁側えんがわに一眠り眠るつもりである。

(二月十四日)

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---